
ポケットモンスターの可能性

yugata

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケットモンスターの可能性

【Zコード】

Z8394V

【作者名】

yugata

【あらすじ】

機械とは本当に奇怪である。プログラム通りに動いているので人間の言つことは聞かない。しかし、たまに人間の言つことを聞く機械もある。その不思議なことを踏まえての不思議なポケモンの物語

ものがたりのものがたり（前書き）

ツヤガ「はい。こんにちは。私は作者代理です。詳しいことは他の小説で。今回は友人がポケモンの小説を書けばどうたらと言つてたのでお試しに書いてみました。この小説が続くのか分かりませんがよろしくお願ひします」

ものがたりのものがたり

主人公「また最初からか」

ゲームの主「ポケモンって最初から始めると何故か飽きずに楽しめるんだよな」

オーキド「この世界は」

いつも通り台詞はスキップされる。そして名前が決まる
ゲームの主「どうしようかな」

主人公「（また、レッドとかサトシになるのか）」

ゲームの主「ん~。今回は、これでいこう。クズな主人公、クーズ
だな」

だが、その瞬間アドバンスの電源が切れる

ゲームの主「！？あれ。つかないぞ」

クーズ「なんだ？バグか。これで操られなくて楽だな」。ていうか
クーズは無いだろ

天の声が聞こえる（台詞が出る枠が急に出てくる）

¥#+*^, ”～タメバ＼ あ・・・あ、あ。これで喋れる
か。デハハナソウカ

クーズ「さっきまで片言じやなかつたよな！？」

ウルサイ。ダマレクズ

クーズ「クズじゃない。クーズだ」

クズ、ハナシラシヨウ。オマエガクリアシナイトコノゲームハナオラナイ。イヤ、オワラナイトイッタホウガイイカ

クーズ「何を言つてるんだ！」

イツカワカル。ソレマデテキトニーガンバレ。クズ

そして急に消えた

クーズ「・・・とにかく最後までクズ呼ばわりだつたな」

急に周りが明るくなる。そこは見慣れた、このゲームの主人公の部屋

クーズ「やるしかないな」

いつもは主に操られて動くクーズだが今回は自分の意思で動ける

クーズ「じゃあ早速きずぐすりを・・・！」

ボックスにはハイパーボール999個だけが入っていた

クーズ「・・・」

謎の人物「クーズ。朝御飯よ」

階段を上がってきたのはお母さん、ではなかつた

クーズ「…誰だ。テメー」

謎の人物「あら、酷いわね。貴方の母親の、マグマ団のしたつぱ（女）じゃない」

外見は、主人公であるクーズと同じ歳くらいだ

クーズ「（…そうか。今はバグでこの世界が壊れてるのか。だからつて、これはないな）」

ゲームの主は様々なポケモンシリーズを同時にやっていたのでゲームが他のシリーズのゲームを覚えていたのだろう。それはクーズも同じであつた

クーズ「しょうがない。バグの中でもクリアしなくちゃな」

母親？「クーズ。昼飯出来たわよ」

クーズ「はやつ！まだ朝御飯も食べてないよ」

クーズ「しかし、いつもだつたら草むらに入ればオーキド博士が来るが」

そもそも草むらがない

クーズ「どうするか。せめてポケモンを持つてないと

持ち物はハイパーボールが99個ある

謎の人物「おい、クズ。ポケモン貰つたんだからバトルしようぜ」

クーズ「（まさか、）の声は）・・・グリーンか

グリーン「よう。バトルは知つてるだろ？よし勝負だ！」

グリーンはライバルの名前だ。何故かグリーンになつている

クーズ「ポケモンが居ないんだが

「オーキド」「こらー！ポケモンを持つてないのに草むらに入るんじやない。・・・む。まだまだじやの。もっと草むらに入つて色々なポケモンを探すのじやな」

クーズ「オーキド博士！？しかも台詞がいつも混ぜ

「グリーン「俺はチャンピオンになつたんだよ。見せてやるぜ。最強の俺様を！」

クーズ「（くつ。突つ込みが追い付かない。だつたら）」

逃げるコマンドを選択した

マサラタウンに居たがトキワシティに逃げた

クーズ「はあはあ。疲れた」

一気に駆け抜けたので息切れしている

クーズ「ランニングショーズは無いのかよ

「ピッちゅー！」

クーズ「？」

「ピッちゅー、ピッちゅー」

下から鳴き声が聞こえてくる

クーズ「」の鳴き声は確かに

ピカチュウの進化前、ピチューだった

クーズ「凄いな。カントーなのに色々なポケモンが出るのか。よし、早速GETだぜ」

手持ちいっぱいのハイパーボールを投げまくる

しかし、全て避けられる。そして、でんきショックを喰らう上手に焼けましたーーー！

クーズ「くつそ。せめて手持ちにポケモンがいれば……？」

いた。いつからいたのか知らないがいた

クーズ「ドジョウチ・・だと・・（水、地面、だからピチューには

有効だが何故ドジョッチを選んだんだ、このバグゲーム）

クーズ「考へても意味ねえな。いけ！ドジョッチ！」

「ドッ・・・ドジョ」

クーズ「水（泥沼）がないから死にそうだ――！」

そんなドジョッチにピチューはでんきショックを放つ。もちろん効果はない

クーズ「くつ。とりあえず、ドジョッチ どろばくだん！」

あのハイパーボールを避けたピチューがドジョッチのどろばくだんを喰らつた。泥が目に入り命中率が下がる

クーズ「よし、そのまま。みずてつぽう」

体中の水分を頑張つて集めて圧縮した水を放つ

「ピチュー！」

でんきショックでみずてつぽうに応戦した。だがドジョッチの勝ちだつた。しかし威力の落ちたみずてつぽうを利用してピチューは目を洗つた

クーズ「今だ！」

すかさずハイパーボールを投げる

ピッ　　ピッ　　ピッ

ポン

クーズ「よっしゃ。ピチューを捕まえたな」

ボールを持ち一度出してみる

「ピチューーーー！」

出てきた瞬間、クーズの腹にダイレクトアタックを決める

クーズ「うひぐ・・・ここひ」

こんなやつたりをしている間にデジヨウチは、どんどん弱つていつた

ものがたりのものがたり（後書き）

ツヤガ「早速、キャラ設定！！」

クーズ（男）

見た目は赤、緑、青の主人公。名前をレッドにしようかと思つたが、なんとなく止めた。（ライバルはグリーンなのにな）性格はアニメのサトシに近付けようかと

クーズ「しかし、ライバルは完全に俺のことクズって言つたよな」ツヤガ「まあ、いいじゃですか。クズなんだし」クーズ「はー？俺はな。ゲーマーであるゲームの主に何回も操られながら何回もチャンピオンになつたんだぞ」ツヤガ「そうですか。まあ、そうですか」クーズ「（こいつ、ムカつくな）」ツヤガ「それではこの辺で。ばいばい」

ものがたりのポケット

クーズ「ドジョウッチー！！」

今、ピチューをボールにようやく入れたがドジョウッチが干からびて
いる

クーズ「早く。ポケモンセンターに」

だがポケモンセンターの場所を見た瞬間、固まつた

そこには、ポケモンジムがあつた

クーズ「（あれ？トキワは最後のジムだつたよな。え？じゃあジム
があつた場所は）」

ポケモンセンターがあつた

クーズ「あ～。入れ替わってるのか」

そして入れ替わったポケモンセンターに入る

謎の人物「よく來たな。クーズよ。お前は私を何度も邪魔す」

ブーン（ドアを開けた音）

クーズ「なるほど。あれはジムだつたのか。サカキが何か言つてた
が無視だな。そうなるとジムの形したポケモンセンターが本物か」

ジムに行く。だが開かない。原作ではジムリーダーが留守で開かない。そう、だから、こちらも開かないのだ

クーズ「・・・回復出来ないんですけど」

だが幸い草むらが無いので野生のポケモンには会わない

クーズ「ん？待てよ。このバグゲームなら酔っ払いのオジサン居ないんじゃないか」

いつもいる場所を見る。そこにはポケセンの受付のお姉さんがいた

クーズ「え？・・・回復出来るんですか？」

ジョーイ（名前合ってる？）「はい。」^{ううう}ポケモンを渡して下さい

クーズ「あ、はい」

てん、テン、テロリーン

ジョーイ「はい。皆元気になりましたよ」

クーズ「（浮いてたよな。ボールが浮いたよな）」

バグで機械は見えないらしい。だから浮いたように見えたのだ

クーズ「このゲーム。本当に大丈夫かよ」

そして次の目的地トキワの森に入る

クーズ「！？」

目の前から飛んでいる大量のむしとり少年が来た

クーズ「…何これ。とにかく逃げるーー」

ゲーム説明：上から来るむしとり少年を避ける。自分が移動出来るのは右か左だけだぞ。むしとり少年は早い奴や遅い奴がいる。惑わされずいこう

クーズ「ふ〜。別ゲームになつたな」

難易度は低かつたので問題なくクリアした

そして「ビシティに着いた

クーズ「流石にポケモンのレベルを上げないとタケシには勝てないよな」

だがトレーナーも野生ポケモンも居ない。いや、トレーナーは居たが

クーズ「…いい」と、考えた。こい、ピチュー」

出てきてまたダイレクトアタックをする。が、今度はクーズに止められる

クーズ「よし。これで何もできまい」

ペチコートを西田でしかりと賣んだ。中川の「アマサヤ」は西田で

クーズ、ビチュイ。お前は何処から来たんだ？」

「ピチュ、ピチュー」

ケーブル

なんとなく放した

いじめのことをはじめていたいぢめをはじめる

クーズ「上から来たつて。どこのラピタだよ」

「ピチュー！・ピチュー！」

怒っているようだ

クーズ「怒られてもな。どうするんだよ」

カイリューに乗つてやつてきた

謎の人物「H A I H A、H A ! よう、皆のヒーロー。ワタルだよ」

クーズ「・・・（なんか、来た～）」

ワタル「いや～。クズ君久しぶり。いつもカイリューがやられてたよ。全く、君は強いな。HA-HA、HA！」

クーズ「（ワタルさんがキャラ崩壊してゐーーー）えっと、どうしたんですか」

ワタル「空に行きたいのだ。任せなさい。私が連れてつて上げよう」

クーズ「え？ なんで？」

問答無用でカイリューに乗せられ空に向かう

ワタル「クーズ君は知らないかもしれないから話そつか。今、このゲームはバグを起こしている。ゲームの主がゲームを出来ないから、皆、自由に動いているのだよ」

クーズ「（建物も自由に動いてたな）」

ワタル「だから、私がここにいるのだ」

クーズ「へ～。そうなんですか」

ワタル「では、頑張つてくれたまえ。私は、まだ旅をするからな」

カイリューに乗つて何処かへ行つた

到着したのは、あたり一面、白いタイルみたいのが敷かれている雲

の上だった。柱が何本か立っている

クーズ「これは・・・?」

「よく来たな。クーズよ」

クーズ「誰だ!（脳に直接話しかけられる感じ。ポケモンか）」

「我的名はアルセウス。神だ」

クーズ「アルセウス!!!（まさか…ピチューはアルセウスによって作られたポケモンなのか）」

「違う。そのピチューは可愛かったから、せりつてきたのだ」

クーズ「心読むな。そして神なのにさらつなよ!（へんだ、あの首飾り）」

「可愛かった」

クーズ「いや・・・知らないから」

「まあいい。我と戦いに来たのだる?」

クーズ「目的は、よく分からぬが、そりだと想ひが」

「では、始めるか。そつちはピチューとジジョウチを出すのだな」

クーズ「最初から、そのつもりだ。いけ、ピチュー・ジジョウチ!」

相手は神と言われているポケモン。恐らく、ピチューとドジョッチで倒せる相手じゃないな。だが勝算はある

ものがたりのポケット（後書き）

ツヤガ「あれれ。もうアルセウスが出ちゃった」

クーズ「いや。その前にピチューとドジョウチじや倒せないだろ」

ツヤガ「最後に 勝算はある って言ったから多分平気だよ」

クーズ「それならいいけど」

ツヤガ「感想とかテキトーに待つてます」

ものがたりのモチーフ

クーズ「よし、ピチュー。でんきショックー・ドジョッチ。どうばく
だん」

「匹の攻撃がアルセウスを襲う

「そんな技喰らわないわ！！」

ハイパーボイスで一人の攻撃を無効化する

クーズ「やつぱり。無理か」

「今度は、こちから行くぞ！！」

「ドジョー・・・？」

ドジョッチに向けて、あくびせつだんが放たれる。しかし、ヌメヌメしてこむドジョッチは滑つて当たらなかつた

クーズ「えー……ドジョッチ有り得ないだろ。・・・いや、チャンスだ。ピチュー、わるだくみ」

「ピチュー、ピチュー」

「ドジョッチ、」とわざ。ならば、はあ……」

ときのまつりがドジョッチを狙つ。だが同様に避けられる

クーズ「ドジョウチがここまで時間を稼いでくれるとた

その間にピューはわるだくみを、やりまくる

「ならば、見せてやるわ」

アルセウスの色が緑色に変化する

「喰らえ……」

クーズ「……ドジョウチ」

アルセウスが使った技はリーフストーム。水、地面のドジョウチは一撃だらつ

クーズ「とびけーー！」

走ってドジョウチを助けようとすると。だが間に合いそうにない

クーズ「くそ。・・・ー？」

突然、足がバグを起こす。そして戻った時には

クーズ「ランニングショーズ！！よし、これなら

靴の力を借り早くなつたクーズはドジョウチを捕まえる

「ドジ四一。」

しかし、滑つて手から飛び出る。そしてクーズがいる場所にアルセ

ウスのリーフストームが炸裂した

「よく、死ななかつたな。クーズ」

クーズ「危ないな！死ぬかと思ったぜ」

驚異の身体力でリーフストームを避けた。だが服は切れている所が多い

クーズ「（緑になつた瞬間リーフストームか。恐らくタイプを変えたな。確かアルセウスのタイプを変えるにはプレートが必要なはず）」

「ピチュー・ピチュー！」

わるだくみで特攻が最高レベルになつた

「ふむ。ならば倒すのみ！」

色が黄土色になる

クーズ「やばい。あれば地面タイプ。ピチュー。避けろ！」

だいちのちからがピチューを襲う

クーズ「ドジョウッチ。マグニチュードー！」

「ドジョウー！」

クーズ「（これでアルセウスの攻撃を粉砕するしかない。あとはマ

グニチュード次第だ)」

マグニチュード

10

クーズ「よし、いけ――!」

アルセウスのだいちのちからと、マグニチュード10がぶつかる。だがアルセウスのだいちのちからは防げなかつた

クーズ「ピチュ――!」

だいちのちからで吹つ飛ばされる。クーズはピチューをナイスクヤツチした

クーズ「ピチュー! 大丈夫か?」

「ピチュー・・・」

弱つているが、まだひんしではない

「!?. いくらドジョツチのマグニチュードで弱くなつたといえ、ピチューが耐えただと」

クーズ「・・・はつ! そつか。アルセウス! お前がだいちのちからの前に使つた技を思い出せ」

「我が使つた技。そつか、リーフストームか」

リーフストームは強力な技だが使うと反動で特攻が下がる

クーズ「ピチュー、頑張れ。お前が居ないと、この勝負勝てない！」

「ピチュー……」

空元氣だらうが元氣を出した

「面白い。ならば本氣を見せてやるつー……！」

空氣が変わる。今まで封じていた力が解放される

「一撃で終わらせるつ。はああーーー！」

クーズ「わざきのつぶてか。ピチュー、わざきのつぶてに向かって、でんじは」

「ピチュー……」

わざきのつぶてに電氣が混じる

「我的攻撃を強くして、どうあるのだ」

クーズ「これはドジョウチなどのヌメヌメの奴を確實に捕まえられる手袋！」

「だから取り出したかしらないが手袋をした

クーズ「ピチュー。ドジョウチ。いくぞ」

ピチューを抱え、ドジョウチを掻む。そしつ、せばきのつぶてをギリギリまで近付けてジャンプをして上に行つた

クーズ「よし。ピチュー。俺たちに、でんじはだ」

「ピチュー？」

クーズ「大丈夫だ。俺を信じろ」

自分たちでんじは、がかけられる

「なるほど。我の攻撃にしたでんじはは、今やつたでんじはと違つ電極か」

クーズ「さうだぜ。これで俺は浮く！――」

反発力により高く浮いた

クーズ「よし、こつナ――！」

ハイパーボールをアルセウスに投げる。その瞬間

クーズ「ピチュー。フルパワーのでんきショック！ドジョウチ、みずてつぽう――」

アルセウスはハイパーボールを避けた、すぐでありピチュー達の攻撃に反応が遅れた

「だが、まだ甘いな」

アルセウスの色がまた縁になる

クーズ「草タイプ。くそ。でんきも水も効きにくい（あのタイプ変化を止めないと）」

「匹の技を合わせた技はあまり喰らわなかつた

クーズ「だつたら。ピチャュー、でんじは。ドジョウチ、みずあそび」
落_下しながらだが命令をする。みずあそびで範囲が広がつたでんじ
はがアルセウスに当たる

「ぬうう」

クーズ「（あのタイプ変化はプレートによるもの。だつたら何処か
にプレートを持つてゐるはず）」

「ドジ四一。」

ドジョウチの尻尾がクーズの首に当たる

クーズ「あれか！！」

首飾りをアルセウスはしていたが、そこにプレートがあつた

クーズ「（・・・俺が取りに行くしかないな）ドジョウチ、ピチャ
ー。俺を背中から叩け！！」

「デジ四...」「ピチ四...」

一匹の尻尾に思いつきり叩かれる。そして、加速してアルセウスに近付く

「でんじは、！」とき...」

アルセウスは力で、でんじはを無理矢理、解除した

クーズ「もうつたー...」

アルセウスの首飾りを掴む。落下したスピードがあるので首飾りは簡単に外れた

「！？首飾りを」

クーズ「よし。ピチュー...デジヨウチー でんきショック、みずのはじう

「デジ四...」「ピチ四...」

一匹の技が同時に放たれみずのはじうの輪でんきショックが混ざる

わるだくみでフルパワーのでんきショックと、みずのはじう、がアルセウスに直撃する。そしてアルセウスは倒れる

ドーン...

「ぐわああ

クーズ「いつて——！——！」

かなりの距離から落ちたが主人公の補正で平氣だつた

クーズ「やべー！ピチュー！ドジョッチ

一匹は、まだ落下している。だが落下地点はクーズの所だ

クーズ「嫌な。予感しか！——！」

ピチューとドジョッチがクーズに体当たりをする

「ピチュー！」

ピチューは元氣そうだ。ドジョッチは、みずのはどう、を使い干からびそうだ

「よく、我的分身を倒したな」

クーズ「へ？分身」

立ち上がったクーズの目の前にアルセウスがいた

クーズ「わあ！びっくりした。それより分身つて」

「ああ、そこで寝てる奴は我的分身だ。流石に本物の我と戦つたら勝ち目はないからな」

クーズ「はあ。なんだよ。本物に勝つたと思ったのに」

「まあ、あれだ。これは【神々の遊び】だ」

神々の遊びと言ったところは、いつのまにか復活したアルセウス（分身）とタイミングを合わせて演技しながら言った

クーズ「・・・そうか。あ！今、気付いたが俺はどうやって戻るんだ？」

「我的力を使えば簡単だ。その前にポケモンを回復させよう」

アルセウス戦で傷付いた一匹が回復していく。（ピチューは傷が治り、ドジョッキは潤いが戻る）

「クーズ。これからお前には様々な困難があるだろう。だが負けるな。全てが終わった時に後悔しないようにな」

クーズ「え？ ちょ、まつ」

「神は乗り越えられる試練しか与えないか・・・。我ながら良いことを思ついたな」

（一矢シティー）

クーズ「あいつら話聞かねえな。・・・よし、ジム戦に行くか

ものがたりのモチル（後書き）

ツヤガ「特攻とか下がるのは関係してきますね。もちろん上がるのも」

クーズ「ドジョウチ。ありがとな。お前のヌメヌメが無かつたら負けたぜ」

ボールの上から撫でる

「ピチューーー！」

勝手にボールから出てクーズの腹に体当たりする

クーズ「いって・・・なんだよ。ピチューー」

ツヤガ「（やきもちかな？）」

「ペッ！」

拗ねたピチューだった

ツヤガ「気にしちゃ駄目なんだうナビ、ヌメヌメで特殊攻撃つて避けられないよね。まあ、気にしちゃ駄目なんだうけどさ」

クーズ「最初から気にしちゃ駄目って言えよ」

ツヤガ「ピチュー、でんきショック！」

「ピチューーーー！」

クーズ「ピチュー、お前・・・」

バタツ

ものがたりの長寿（前書き）

ツヤガ「あ～、暑い。夏は暑いよ。今回の話に燃えるって書いてあります。夏がさらに暑く感じるかもしれませんね～（ないか）」

ものがたりの長寿

クーズ「・・・またポケセンと入れ代わってるのか」

トキワと同じでジムとポケセンが入れ代わっている

クーズ「！そだ。博物館行こう」

（博物館）

受付「入場するには一人、500円払ってください」

クーズ「（なんで、ぼうそうぞくが受付なんだよ。しかも地味に高くなってるし）はい。500円です」

受付「あ～、ポケモン一体につき追加で100円です」

クーズ「流石にそれは・・・」

受付「なんだと・・・やんのか、『ゴラア』」

クーズ「・・・ポケモン勝負ならやりますよ

受付「ほ～、小僧、この前世ポケモンチャンピオンと言われる俺とやるのか？」

クーズ「（前世なんだ）いいですよ。強い相手の方が燃えます」

（移動）

審判「では、両者位置にー。」

クーズ「（なんでタケシが審判なんだよ。ジムは、どうしたー。）」

タケシ「ルールはそれぞれ一体ずつの一一本勝負。では、始めーー。」

受付「いけー！ホウオウーーー！」

クーズ「ピチュー、お前に決めたー！」

「ホーホー」「ピチュー。」

受付はホウオウと「ウー」とクネームのホーホーを出した（一度は考
えるネタだよね）

受付「こいつからいくぜーーー。ホウオウ、たいあたりーー！」

前世ポケモンチャンピオンと言われてるだけ、ありかなりのスピードだ

クーズ「ピチュー、避けてから、でんきショック！」

「ピチューー。」

ホーホーのたいあたりをジャンプしてかわし、でんきショックを放つ

受付「甘いな。ホウオウ、とっしん」

たいあたりの時より速い動きでピチューのでんきショックを避け、落下してきたピチューを攻撃する。空中で何も出来ず喰らつ

クーズ「ピチュー！」

受付「カスだな。・・・・？」

ホーホーが麻痺している

クーズ「そうか、ピチューの特性、せいでんきか！。よし、ピチュー今だ。でんきショック！」

ホーホーは麻痺で動けない

受付「ハハハ、まだだ。ホウオウ、サイコシフト！」

クーズ「なに！」

サイコシフトは自分の状態変化を相手に与す攻撃である（特性のシンクロと一緒）

「ピッ、チュー！」

でんきタイプのピチューは麻痺くらいなら平気だった。そしてホーに攻撃が当たる

受付「！？な、ホウオウ、ねんつき！」

「ホオ――！」

超能力によりピチューが浮き何度も地面に叩きつけられる

クーズ「（）のままじゃ、ゴリ押しされる。どうにか……」

タケシ「クーズ君。元ジムリーダーから聞いたことがある

クーズ「え？」

タケシ「ポケモンに不可能はない。いくらだって強くなれる。可能性は無限大だ」

クーズ「……。ピチュー！お前ならできる。十万ボルト……」

「ピチュー……！」

受付「ホウオウ。負けるな！エアスラッシュ！」

今、二匹の技がぶつかり合い爆発を起こす

クーズ「ピチュー！」

受付「ホウオウ！」

煙が全て引いた時

タケシ「勝者、クーズ」

クーズ「よっしゃあ！ピチュー。うげふ

抱きつこうとしたが蹴られた

受付「ちつ。しおりがない。バトルに負けたからポケモンの代金は無しだ」

謎の人物「コラアーバイト！なにをサボつてんんだ」

受付「やべ。見つかった」

博物館の係の人「すいません。このバイトが、なにか、やらかしたようだ」

クーズ「いえいえ。こちらもバトル出来たのでいいですよ」

博係「なにーそんな」としてたのか！！」

受付「まあ、いいじゃねえかよ。気にすんな」

博係「バイトのくせにうるさいー本当にすいません。御礼と言つては、なんですが、これを」

クーズ「これは・・・」

みずみず玉を貰つた

博係「これは水タイプに持たせると喜びます」

クーズ「（喜びふ・・・）」

博係「では」

バイトの受付と一緒に博物館に帰つた

クーズ「あー、タケシさん」

タケシ「ん? なんだい」

クーズ「さつき、元ジムリーダーって」

タケシ「ああ、それか。これは一時間前に起つた出来事だ」

タケシ「挑戦者か?」

謎の人物「いや、侵略者だな」

タケシ「!?」

タケシ「気付いたらジムの外さ」

クーズ「(侵略者か) じゃあ今からジムに行くから一緒に行きますか?」

タケシ「そりだな。さつきは何も出来なかつたから今度は、あいつらみたいに追い出してやるか」

クーズ「あー、そうだ。ドジョウチ」

ボールからドジョウチが出てくる、もう少しひん地面なので時間が経てば死ぬだろう

クーズ「ドジョウチ。みずみず玉だぞ」

ドジョウチに持たせる。すると潤いが出てきた

「ドジョウチ」

クーズ「おー元氣でたでた。これでドジョウチは地面でも平氣だな」

タケシ「じゃあ、ポケセン寄つてから行くか」

ものがたりの長寿（後書き）

クーズ「ピチュー。なんで抱きついちゃ駄目なんだよ」

「ピッ、ピチュー。」

クーズ「？分からん」

ツヤガ「ピチュー、こっちにおいで」

「ピチューーーー。」

ツヤガに抱きつく

クーズ「（あれか、ピチューはオスなのか）」

ものがたりの軸

クーズ「（ポケセンがジムだと迫力ないな）」

そんなことは気にせずジムに入る

謎の人物「あれ？」今、ここは私達、【デフェク団】の物ですよ。
勝手に入つて来られては困ります」

タケシ「何を言つている！－ジムリーダーの交換は正式な物が」

謎の人物「黙れ。 いんだよ、 侵略したから」

クーズ「だったら、 侵略し返せばいいんだな？」

謎の人物「へー。 お前、 僕に勝てるとでも思つてんの？」

クーズ「やつてみなきや。 分かんないだろ？」

謎の人物「ハハハ。 いいだろ。 僕の名前はグストだ」

クーズ「俺はクーズだ」

タケシ「では、 両者位置に！」

今、 二人の戦いが始まる。 果たして結果は、 どうなるんだ

グスト「いけ、 デンリュウ！」

クーズ「ドジョウチーお前に決めた」

グスト「（水、地面か。相性悪いな。だが）デンリュウ、シグナルビーム」

クーズ「ドジョウチ、避けるー。」

ヌメヌメ補正で地面を滑りながら移動する

グスト「シグナルビームを右、左、真ん中の順に撃てー。」

右に撃ちドジョウチが止まり左に行こうとする。そこにまたシグナルビームが来てドジョウチは混乱して動きが止まる

クーズ「くつ。ドジョウチ。シグナルビームに、みずのはどうー。」

だがドジョウチが放つ前にシグナルビームが当たる

グスト「まだまだー。テンリュウ、ほのつのパンチー。」

ドジョウチにテンリュウが近付く

クーズ「ドジョウチ、マグニチユードで応戦だー。」

「ドジワー。」

グスト「ジャンプでかわせーー。」

「テンー。」

ジャンプでかわす

クーズ「よし、今だ。 デジヨウチ、みずてつぱつー。」

クーズは避けることを計算に動いていた

グスト「ククク・・・ハハハ!!『テンリュウ』、ドレインパンチ!!」

クーズ「なにーー。」

またグストも裏の裏を読んでいた。 みずてつぱうで火を消された逆の腕でドレインパンチを使つ

「デジ四ーーー。」

クーズ「デジヨウチーーー。」

タケシ「デジヨウチ、戦闘不能

クーズ「くわ。 デジヨウチ、ありがとな」

デジヨウチをボールに戻す

クーズ「次は、こいつだ。 じい、ピチューー。」

「ピチューー。」

グスト「はあ? デジヨウチとか出してる時点でおかしこと思つたが進化させとけよ」

クーズ「うるせえ。まだ始めて数時間しか経つてないから、しょうがないだろ」

グスト「まあ、この程度なら即行で倒せるな。デンリュウ、シグナルビーム！」

クーズ「避けてから、でんきショック」

シグナルビームを避け、デンリュウでんきショックが当たるが、あまり効いていない

グスト「ショボいな。デンリュウ、パワージェム！」

無数の岩がピチューに向かって飛んでくる

クーズ「パワージェムと自分に、でんじは！」

アルセウス戦で身に付いた電気の力を利用した技である

グスト「だつたらパンチ、ほのうのパンチ！」

クーズ「（くつ、ピチューじゃ有利な技がない）ピチュー！十万ボルト」

グスト「待つてたゼー！デンリュウ、じゅうでん！」

クーズ「！？」

デンリュウは、ほのうのパンチを直ぐ止め、ピチューの十万ボルト

を吸収した

グスト「よーし。デンリュウ、かみなりパンチ！」

「ピチューーーー！」

グスト「（）のままじゃ、負ける）」

グスト「終わりにするか。デンリュウ、かみなりーーー！」

「テーンーーー！」

クーズ「ピチューーーー！」

かみなりパンチで吹っ飛ばされたばかりで反応できない。かみなりはピチューに当たり煙を大量に出した

グスト「ハハハ、俺の勝ちだな」

だが明らかにおかしい。何か音がしている

クーズ「?なんだ、このパチパチする音は」

煙が少し引いたところで正体が分かる

グスト「電気がーーー？」

そこには、電気を抑えきれないピチューがいた

クーズ「（なんだ、この感じ）ピチュー、十万ボルトーーー！」

「アーヴィング、アーヴィング！」

ゲスト「テンリュウ、じゅうでん！」

「アソブ！」

じゅうでんでピチューの十万ボルトは吸収されるが、ピチューは止まらない

ゲスト「（ぐる、）のままだと」

ケリスー よし、一気に置み掛けろ！」

さうにヒヂニーの十万ボルトの威力が上かる
テンリニヤは全て吸
收できず十万ボルトを喰らう

タケシ一 テンリエウ。 戦闘不能！」

「ゲスト」（あの威力、なかなか面白いな）審判、俺の手持ちは、もういいないから俺の負けだ」

クーズ「おい、また」

だが無視してジムを去つていった

タケシ「あのグストつて奴、まだボーリを持っていたな」

クーズ「え? じゃあ、さつきのは」

タケシ「何かの理由で嘘をついたんだろう?」

クーズ「あ、ピチュー」

ピチューは倒れていた

タケシ「！ 酷い熱だ。早くポケセンに連れていく！」

ものがたりの軸（後書き）

ツヤガ「毎回、みんな覚醒していくよ～。これじゃ相手が可哀想じ
やん」

クーズ「じゃあ俺の手持ち増やす、しかないでしょ」

ツヤガ「それがね。ポケモンを何にじょつか迷つてるんだよ。全員
出れるから選択肢が多くて」

クーズ「カツコいいポケモンを希望…」

ツヤガ「もちろん。あまり使われないポケモンを使うよ

クーズ「（それってカツコ良くも強くもないよな）」

ものがたりの歓喜

ジョーイ「今は安定していますけど、このピチューは、どうしたんですか？」

ピチューをポケセンに連れていきジョーイさんに診てもらつた

クーズ「実はカクカクシカジカなんです」

ジョーイ「……なるほど。一度ピチューの精密検査をしてみませんか？ 何か分かるかもしれませんし」

クーズ「そうですね。よろしくお願ひします」

タケシ「クーズ君。俺はジム関係で色々あるから帰るね」

クーズ「あー色々ありがとうございました」

タケシ「なに、大したことないよ。じゃあね」

クーズ「（このバグゲームでも良い人いるんだな）」

（敵陣）

グスト「だから謝つてるだろ」

謎の人物A「謝つて済む問題じゃない」

謎の人物B「キヤハハ。流石、問題児ね」

グスト「んだと…！」

謎の人物C「あわわ。落ち着いて下さい」

グスト「ちつ。覚えておけよ、752」

752「ええ、いいわよ。貴方がカスだつてことを覚えるわ」

グスト「やっぱ、今から殺す…！」

謎の人物A「二人とも止める！あの方に報告するぞ」

二人とも急に黙る

謎の人物A「で、グストは何か分かつたのか？」

グスト「ああ？…そうだな。分からないと言つておくさ」

謎の人物A「…まあいい。今度から自重して行動しろ」

グスト「へいへい」

「ポケセン」

クーズ「ありがとうございました」

ピチューの精密検査でしたが結局何も分からなかつた（健康体だつ

た)

クーズ「よし、次はハナダシティのジムだな」

「三番道路」

クーズ「ピュー、十万ボルト！！」

「ピューーーー！」

ポケトレ（女）「私の可愛い。ミズゴロウがー？」

クーズ「（原作と、かなりポケモンが違つて楽しいな）」

無事にお月見山の手前のポケセン着いた

クーズ「よし、トレーナーがいたからレベル上げも、そこそこ出来たな」

だがポケセンの前に人影ならぬポケ影がある

クーズ「あのシリエットは？」

「・・・カモ」

クールなイメージのカモネギである

クーズ「（カモネギさんだーーー嘘だろ。あのカモネギさんが！
！）」

そこまで褒めることもないだろ？

クーズ「よーし。早速ゲットだな。お前に決めたピチュー……」

「ピチュー。」

出てきた瞬間カモネギが動く

クーズ「…? ピチュー。避ける」

だがカモネギの動きが読めず、れんぞくぎり、を喰らう

クーズ「でた！ カモネギさんの、いわくいわく、からい、れんぞくぎり、コンボだ！」

「ど」かのカードゲームのキャラの台詞をパクっているクズを無視してピチューは、でんじば、を放つ

「… カモ」

しかし、いわくいわく、で早くなつたカモネギに攻撃が、なかなか当たらない

「ピチュー」

そしてピチューは怒つた

「ピチュー……」

まずクズを焼き焦げにする

クーズ「ピチュー・・何故・・・」

力モネギもピチューの殺氣を感じたのか構える（ネギを鞘に収めた感じ）

ピチューも対抗して構える（ほっぺを詰まんでいつでも放電できるようになります）

二人とも構えて動かない。だが沈黙の間に終止符が打たれる

風が吹いた

ピチューと力モネギが同時に動く

「ピチュー！」
「力モ！」

ピチューの十万ボルト、力モネギの、いよいぎり

先に体が地面についたのは・・・

ピチューだった

だが力モネギもその後、直ぐに倒れた

クーズ「！？力モネギ捕まえるチャンスだ！」

何故か復活したクーズがハイパーボールを力モネギに投げる

ポン ポン ポン

ポポポポン

クーズ「よつしゃ。カモネギGETだぜ！！」

何か変な音がしたが気のせいだろう

クーズ「今、気付いたけどポケモン図鑑がないな」

何故か、カモネギを捕まえて思い出した

クーズ「じゃあ、早速」

「・・・カモ」

クーズ「よろしくな。カモネギ」

「・・・ピチュー！！」

倒れてから放置されていたピチューが怒りクーズにまた十万ボルトを喰らわせる

クーズ「ピチュー。少しば、なつけ・・・グタ」

「・・・カモ」

「ピチュー」

ものがたりの歓喜（後書き）

ツヤガ「短いかもしぬなかつたね」

クーズ「まあ、気にしなきや問題ない」

ツヤガ「カモネギが新しく仲間になりましたね。これで苦手な草タ
イプを克服した」

クーズ「しかし、またネタポケモンだな」

ツヤガ「色々面白い技を覚えるから小説書きやすいのだよ」

クーズ「そうですか」

ものがたりの勝利者（前書き）

ツヤガ「言つの遅かつたですがキャラ崩壊注意ですーー」

ものがたりの勝利者

クーズ「お月見山か。ズバットはピチューに任せると。イシシブテとかはドジョッチで、ゴリ押しするか」

お月見山に入る前に作戦を考える。だが原作と違えば何の意味もない
クーズ「よし持ち物も大丈夫だから行くか」

お月見山を抜けてハナダシティに行くと少しの間一ビシティやマサラタウンに行けなくなる

～お月見山の中～

クーズ「変わった所は特にないな」

だが戦闘に入る

クーズ「！？」

相手はクチートだった。見た目は可愛いが後ろの口みたいな物は噛まれるので危険である

クーズ「よし、ドジョッチ。stand stage！」

台詞を変えてみた。・・・微妙である

クーズ「一気に終わらせろー・マグニチユード」

マグニチユード

「デジヨード・」

「チート・」

てつべきをしてマグニチユードを防ぐ。鳴き声は・・・

「クチクチ」

クチートは、うそなきを使った。これで大体の野郎共は落とせる。
しかし今回は相手が悪かった

クーズ「デジヨット！なんかチャンスだ。もう一回マグニチユード
！」

マグニチユード

「デジヨード・」

二人とも（一人と一匹）は乙女の心なんて何にも分からぬ

マグニチユードを、もろに喰らい戦闘不能になつた

「クチーー」

クーズ「よし、どんどん進むぞ」

順調にお月見山を攻略していく。ポケモンは主に、ズバット、クチート、イワーク、ノコッチなどだった

クーズ「しかし手抜きだな」

お月見山には居なかつたが化石の所にさえ誰も居ない
謎の人物「待て！！」

クーズ「？」

謎の人物「化石は全て僕の物だ！！誰にも渡さない！！渡さないなら倒すのみ！！」

クーズ「（キャラ崩壊してるダイゴさん、きたー！！）」

ダイゴ「（石、石、石石石、石、石）」

クーズ「（なんか小声で言つてるよ。分かんない。怖いよ）」

ダイゴ「貰つたー！！」

クーズの隣にある化石達を狙つて猛ダッシュ

ダイゴ「ウゲフ！！」

だが石に躊躇大胆に転ける

ダイゴ「こんなはずじゃ。。。こんなはずじゃ。。。」

なんか地面を叩きながら悔し涙を流している

クーズ「・・・」

クーズは嘆然としている

（ ； 。 。 ） こんな感じ

ダイゴ「すまない。見苦しい所を見せてしまった。私はダイゴ。どちらの地方のチャンピオンだった人さ」

クーズ「俺はクーズです。チャンピオンって凄いですね」

ダイゴ「いや、大したことないよ。鋼タイプでガチガチにすれば余裕さ」

クーズ「・・・ そうですか」

ダイゴ「君は、この化石の所有者かい？」

クーズ「えっと・・・ 多分そうです」

ダイゴ「なるほど。ここは平等にポケモン勝負と、いこうではないか！」

クーズ「（ここの化石は俺のなのに！？）」

ダイゴ「さあ、一対壇でいこう」

クーズ「（いやチャンピオンの実力を見たいから、いいか） そのかわり勝つたら好きな方を選ぶでいいですか？」

ダイゴ「・・・フツ。いいだろ？」

クーズ「よし、じゃあカモネギ。stand stage-」

「・・・カモ」

ダイゴ「（カモネギか。メタグロスで余裕だな）」

説明はフラグ

ダイゴ「いけ。メタグロス！！」

「ノコッ！」

ノコッチが出てきた

ダイゴ「しまった！さつき捕まえたノコッチが！！」

まさに「大誤算！」

クーズ「これが言いたいだけだろ。カモネギ、こうそくいどう、から、れんぞくぎつ」

ピチューに攻撃を当てたコンボを使う

ダイゴ「（いや、元チャンピオンの僕なら補正とかが）」

無論、ない。ノコッチは攻撃を受け続ける。れんぞくぎつは連続で当たれば当たるほど威力が上がる

カモネギの一撃がノコツチを襲う

ダイゴ「フツ。まだまだ甘いよ。クーズ君」

クーズ「！？」

ダイゴ「ノコッチ！ いかり！！」

ノーフル

いかりは攻撃を受ける度に威力が上がる。れんぞくぎりで何回も攻撃を受けていたノコッチ

「モモ力」

力モネギは壁まで一撃で吹っ飛ばされる

ダイゴ「これが元チャンピオンの実力さ」

クーズ「（あの力モネギを一撃で・・・）流石ですね」

力モネギをボールにします

クーズ「！？あ、ちょ」

ダイゴ「ハハハ。奪えばいんだよ。奪えば...」

かなりキャラがイカれてる。だが神様は、しつかり見ている

ダイゴ「よしメタグロスで、」の壁を壊して逃げるぞ。 いけ、メタ
グロス！！」

ノノ

ダイゴ「またお前か！――！」

走っていたダイゴは急に止まれず、ノコッチにぶつかり転んだ

ケース
-
・
・
・
あの、もういいんで、一つくださいよ」

タイ一 え? しの? 」

目がキラキラしている

クーズ「・・・もう、いいです」

ダイゴ「 キャー。やつたー。私、化石貰つたわ。ラッキー！」

クーザ「（うぜーーー！）」

ダイゴ「では、僕は「ちうで」

クーズは、いつののかせを、を返して貰つた

ダイゴ「僕はまだこの山を調べるからね。じゃあね～」

クーズ「あ～、はい。また会えるといいですね」

厄介な奴と別れられて良かつたと思ったクーズだった

ものがたりの勝利者（後書き）

ツヤガ「ダイ」「さんは、もう流石しか言い様がないね」

クーズ「色んな所でキャラ崩壊してるもんな」

ツヤガ「皆さんはサブタイトルで「ものがたりの～～」が気になつてますか？」

クーズ「ああ。今回も「ものがたりの勝利者」だつたな」

ツヤガ「実はあれ・・・」

クーズ「（なにがあるんだ？）」

緊迫した空気が流れれる

ツヤガ「何も意味が無いんです」

クーズ「なん・・・だと・・・」

ものがたりの付和雷同

クーズ「まずは『ゴールデンブリッジ』を閉鎖するか」

要するに『ゴールデンブリッジ』を攻略するという意味である

トレーナー（男）「俺の闘志、ファイヤーが！」

クーズ「なんでファイヤーがいるんだよ」

理解不能なポケモンを一人一人持っていた

クーズ「そう言えばライバルのグリーンが出てこないな」

最初のグリーンさえ無視していた。いや逃げた

クーズ「よし。やつと来たな」

マサキの家に着いた

ポケモン？「！？助けてくれや。わいを助けてくれ」

クーズ「任せな。ここでマサキを助けてつて！？」

通常はコラッタの見た目だが、ベトベターの見た目になっていた

クーズ「何これ、グロい。年齢対象無制限のこの小説はきついよ」

そして書けないので素早く装置に入れてマサキを直した

マサキ「いや～、ありがとな」

クーズ「・・・あなたは！？」

見た目がワタルだった

ワタル？「いやいや、すまんね～。最近整形して、ワタルの顔にしてもうたんや」

クーズ「（なんでしまったなんだ？）そりですかー。じゃあ助けたんでチケットを」

マサキ「チケットはジムリーダーのカスミに取られたんや」

クーズ「へ？」

マサキ「まあ、あれだ。可愛い女性には、はかにこつせん、は撃てないよ。みたいな」

クーズ「（船行けないな。カスミから取り返すしかない）じゃあ、また」

マサキ「あーちょ。まつてな～」

ワタルの真似をしたがるマサキを無視してクーズはジムに急いだ

クーズ「ここがジムか？」

落書きばかりされている（夜露死苦みたいな感じ）

クーズ「嫌な。予感しかしないが、行くしかない」

暴走族A「姉御、流石です！！水のプリンセスと言われ

姉御？「ああ？違うでしょ。世界のプリンセスでしょ！？」

足で暴走族Aの背中をグリグリする

暴走族A「はあ、はあ。俺、幸せです」

そこには暴走族数人とカスミがいた

暴走族B「ん？誰だテメー！？」

クーズ「えっと…ジムの挑戦者です」

暴走族C「このカスミ様と戦いたいならリアルファイトで俺達を倒すんだな」

そして暴走族とカスミは爆笑する

クーズ「（なんだこいつら…）」

カスミ「まあ冗談はここまでよ。まあ来なさい！お姉さんがボコボコにして、あ・げ・る」

クーズ「ピチュー。今すぐ殺れ！？」

「○ナニ？」

カスミ「あらあら。怖い、怖い。ヒトデマン、美しく決めるわよ」

へアツ！」

ステージは水がない普通のステージである

ケーズ一ピュリ。十万ボルト！」

カスミ「（十万ボルト。ピチューのくせにやるわね）ヒトテマン。
避けて、あやしいひかり」

ヘアツ！」

アーティストとしての才能を発揮する場所である。

ケースーぐ、混乱が、ヒヂリ、でんじば、

二
九
?

でんじはがケーズに向かって放たれる

カスミ「ハハハ。いい様ね。ヒトデマン、ハイドロポンブ！」

ケース一覧、ピタゴリオ
避ける！」

「ピチュー？」

クーズに突進してきた。だがハイドロポンプは避けた

クーズ「うげふ」

カスミ「フフ、終わりよ。これは避けられないでしょ？なみのり！」

どこからか波が来た

クーズ「ちくしょ。ピチュー、戻れ。カモネギ、そらをとぶ」

「・・・カモ」

クーズの手を掴みながら飛ぶ

「へアツ」

だが波で来たヒトデマンにクーズが当たった

カスミ「ちょっとートレーナーがポケモンを攻撃しないでよ」

暴走族A「そうだ。テメー、殺されてえのかー！」

クーズ「ヒトデマンが当たつてきたんだろー！」

何故かポケモン勝負ではなく口喧嘩をしている

クーズ「カモネギ、つばめがえし！」

「カモー！」

素早い動きでヒトテマンに攻撃が当たる

カスミ「...ヒトテマンが」

審判「ヒトテマン、戦闘不能」

クーズ「(いつからいた。審判よ)」

カモネギに落とされ綺麗に着地した

クーズ「よし、こままいけば」

カスミ「行きなさい。ドククラゲ！」

「ドク～」

基本、鳴き声が分からないと最初の一文字を使つ

クーズ「...ドククラゲ。暴走族になると毒が必要か」

カスミ「ドククラゲ。あやしいひかり！」

クーズ「二度も同じ手は効かないぜ。カモネギ、こまかくこじつ」

素早い動きでドククラゲの攻撃を全て避ける

「...カモ」

カスミ「なかなか、やるわね。ドククラゲ、からみつく！」

ドククラゲの長い触手が何本も来てカモネギを捕まえた

クーズ「ちつ。カモネギ脱出しろ」

だがカモネギの力ではドククラゲからは逃れられない

クーズ「（カモネギを擬人化したら薄い本が作れそうだな）」

カスミ「ドククラゲ！しほりとる」

ドククラゲの触手からカモネギの力が、しほりとられていく

クーズ「（まよい一どりにかないと）」

カスミ「このまま終わりね」

余裕なカスミ様を暴走族の部下達は讃める

クーズ「いや、まだだ。カモネギ！エアスラッシュ」

切るまでは、いかないがダメージを貰えて脱出した

クーズ「かなり体力を持つていかれたな」

カスミ「ドククラゲ！よつかいえき」

クーズ「カモネギ、避けてから、つばめがえし！」

「・・・カモ！」

力を振り絞りドククラゲの攻撃を避けて、つばめがえし、を並べる

カスミ「なかなかやるわね」

審判「ドククラゲ、戦闘不能」

カスミ「じゃあ、私の最強のパートナーを紹介するわ。スター!!」

「へアツ!」

カスミ「スター!!。ハイドロポンプ!!」

クーズ「カモネギ。避けろ!!」

だがヒトデマンとは比にならないほど早く、避けられなかつた

審判「カモネギ、戦闘不能」

クーズ「(なんだあれ。勝てるのかよ)」

ものがたりの付和雷同（後書き）

ツヤガ「果たしてライバルはいつ出てくるのだろうか

クーズ「まあグリーンは強いから出なくていいよ

「ツヤガ」では書くことないので ノシ

ものがたりのサイレント

クーズ「いやなつたら。いけ！ ドジヨッチ」

「ドジヨ」

カスミ「あらら。水、地面つて相性、微妙ね。ピューは出れないのかしら？」

クーズ「いや、お前のスター＝はドジヨッチで充分だぜ」

カスミ「なめられたものね。スター＝、スピードスター＝」

ゲーム中では必中技である

クーズ「ドジヨッチ！ みずのはじり」

「ドジヨ」

スピードスターとぶつかるがドジヨッチの方が強かつた

カスミ「フフフ。スター＝に水をくれてありがとう」

威力が弱まっておりスター＝は水タイプなので喰らわなかつた

クーズ「ちっ、ドジヨッチ。マグニチュード！」

マグニチュードの攻撃がスター＝を襲う

カスミ「スター＝！－避けて、ハイドロポンプ」

ハイドロポンプがデジヨックチ田掛けて飛んできた

クーズ「よつしゃ。デジヨックチハイドロポンプに、たきのぼり」
スター＝のハイドロポンプを登る。デジヨックチが鯉になった瞬間
だつた

カスミ「－？」

クーズ「よしこけ－－！」

たきのぼりがスター＝に当たる。そして下に落ちる

クーズ「まだだ。デジヨックチ、アクアテール－！」

「デジ＝！」

落ちたスター＝に空中からの落下スピードが付いたアクアテール
がスター＝を襲う

カスミ「甘いわね。スター＝、サイコキネシス－！」

「へアッ－！」

デジヨックチの体が超能力により浮いた

クーズ「（やばいな。どうするか）」

と、その時

「ピチューーーー！」

勝手にボールから出てきたピチューが何かを伝えようとしている

クーズ「・・・任せろ。ピチューー！」

よく分からぬがピチューの頭を撫でる

クーズ「（この状況・・・）」

そしてクーズは答えを出す

カスミ「スター＝＝。ドジヨウチを叩き落としなさいー！」

クーズ「やりせないぜー。ドジヨウチ。みずあそび」

超能力で、みずあそび、の水が浮いた

カスミ「何がしたいか知らないけど終わりよーやりなさい、スター＝＝！」

「へアッ！」

ドジヨウチが叩き落とされ煙が舞う

審判「ドジヨウチ。戦闘不能」

クーズ「よし。ピチュー、終わらせていー！」

ドジヨツチをしまいピューを出す

カスミ「フフフ。スター!!…あやしいひかり」

クーズ「ピュー!!十万ボルト」

しかし、あやしいひかりが先に当たる

カスミ「これでもう十万ボルトは当たらないわ！そしてポケモン交換も出来ない。私の勝ちね」

暴走族達がまたカスミを讃める

クーズ「それはどうかな？」

ピューの放った十万ボルトは、サイコキネシスで浮いていり、みずあそび、に当たる

カスミ「まさか！？」

十万ボルトは拡散した

クーズ「やべー！トレーナーを計算に入れてなかつた…！」

クーズはもちろんカスミや暴走族達も十万ボルトを喰らいつ

審判「スター!!。戦闘不能」

クーズ「なんで…審判は…無傷…」

バタツ

倒れたナチヤは最後の力を振り絞り、審判、と書いた
そして時間が過ぎ

謎の人物「HA~HAHA! ワタル。華麗に参上!」

ジムの壁を突き破りカイリューと共に入ってきた

ワタル「ん? そつか。私はマサキとかいう奴に会いに来たのか」

周りを見渡す

ワタル「ふむふむ。さっきの壁を壊したからかな」

審判は帰っていた。他は氣絶している

ワタル「……クーズ君じゃないか。……あれ? クズだっけか、まあいい」

ピチューと一緒に寝てるクーズを起こす

クーズ「ん~・・・! ? ワタルさん!」

ワタル「やあ。お田覓めかい?」

クーズ「・・・本物か」

ワタル「まさかマサキの」と知つてゐるのか?」

クーズ「えーと、はい。なんか整形してワタルさんの顔になつてました」

ワタル「噂は本当のようだな。今すぐ殺りに行くか」

謎の人物「おつと。まちなはれ」

マントを靡かせて登場したマサキがきた

「話が早いな」

カスミ「・・・ん。あ！ダーリン」
クーズ「ダーリン・・だと・・」

「せ女この彼女さひわ。」ササヤ

まさかの事実

「ガオーン」

クーズ「鳴き声、変だな」

マサキ「ちょっと面白こ」としようやないか。 我がイーブイ家族軍団! いけーーー!」

イーブイ、シャワーズ、サンダース、ブースターが出てきた

ワタル「クズ君、手伝ってくれるか?」

クーズ「勿論!よし、ピチュー、いけ!」

「ピチュー!」

カスミ「じゃあ私はイーブイとサンダース借りるわ

マサキ「よしじゃあバトルや!」

まさかの四対一の勝負

ワタル「カイリュー・ド・ゴンクロー!」

狙いはマサキだった

マサキ「ちょ!わいを狙うな。シャワーズ、なみのり!」

なみのりに乗ったシャワーズを掴みカイリューの攻撃を避けた

マサキ「ブースター。おにび!」

ワタル「避けて、みずのはじり!」

ブースターの、おにび、を避け、みずのはじりを放つ

マサキ「シャワーズ!みずのはじり、に突っ込むんや!」

カイリューの、みずのはじう、を喰らう。だが特性ちょい、で水タイプの攻撃を喰らうと体力が回復する

ワタル「ちつ。長引きやうだな」

カスミ「さあて。第一ラウンドとしまじょうか」

クーズ「いいぜ。俺のピチュー、ナメんなよー。」

ものがたりのサイレント（後書き）

ツヤガ「9月10日って、ユージュ、ユージュ、クーズになるからクーズの日」とよび

クーズ「まあいいけど。何かするのか？」

ツヤガ「そだね。番外編にしようか」

クーズ「やつたぜ。楽しみだな」

ツヤガ「フフフ。どう料理しようか

クーズ「なんか悪人顔だぞ・・・」

番外編から飛び出した

ツヤガ「やつた。久々の番外編だ」

クーズ「本文に出ていいのか?」

ツヤガ「いいの、いいの。よし。何しようかな?」

クーズ「考えてなかつたのかよ・・ていうか撮つ」

ツヤガ「いや。数個考えてあるんだよね。1つは、ポケモンを喋らして色々。他は私とバトル。あとフラグの回収とか」

クーズ「・・色々考えてたんだな」

ツヤガ「よし、じゃあ宣伝からいこう」

クーズ「いきなりだな」

ツヤガ「私の他の小説【今 ハンター達は】の応援よろしく〜」

クーズ「(こんな大胆な宣伝は、この小説くらいだらう・・・)」

ナチヤ「といつ」とで登場!!--」

クーズ「出るな!紛らわしいから出るな!」

ナチヤ「まあ主人公同士なんだからいいだろ?」

クーズ「いや、だつて性格が・・・」

ツヤガ「うん。面倒なのとバラエティーが少ないから主人公と周りのキャラの性格は似てるよ」

ナチャ「皆さんも【今 ハンター達は】を見て確認してください」

クーズ「（もう帰りたい・・・）」

ツヤガ「まあ、今ハンは色々なキャラの練習してるから重要キャラだけ性格が似てるかな。じゃあ宣伝は、これまでにして」

そして周りが急に暗くなる

ツヤガ「皆さん、お待ちかね。9月10日、クーズの日、スペシャル回です」

スポットライトがツヤガに当たる

クーズ「おお～」

ツヤガ「今回は【銀き冷氣の力】をお送りします」

急にスクリーンが出てきた

クーズ「大変だつたぜ」

ツヤガ「これはフィクションです。（小説と関係ない）設定的にはクーズが主人公の映画のような物だと思ってください」

フリージオは下に垂れている鎖でクーズを掴みに逃げた

男性「馬鹿！来るんじゃない。俺たちは大丈夫だ。フリージオ、クーズを頼む！」

親の元に行こうとした子供

子供「お母さん！お父さん！」

二人は必死に逃げる。だが雪崩のスピードには勝てない

男性「なにー？」

女性「！？雪崩」

パ、パ、パ、パ

だがその時

男性「そりゃ。この村の伝説的なポケモンだからな

女性「あらあら。おおはしゃぎね

子供「待つて～。待つてよ～」

何か浮かんでる物体を追いかける子供

クーズ「お父さん……お母さん……」

「現在」

「」はある雪が多く降る村。この村には特別なポケモンが住んでいると言われる

クーズ「あ～。雪が止まないな」

今、季節は冬である。冬での村では雪が止むことは少ない

クーズ「しかし、毎日毎日疲れるな」

雪かきをしてくる。やらないと道が無くなる

「ピチュー……」

雪かきをしてくるクーズにあるポケモンが近付いてきた

クーズ「よお。今日も来たか」

「」のピチューは、たまに来るポケモンである

クーズ「ちよつと疲かった。ピチュー、十万ボルト」

「ピチュー……」

十万ボルトで雪をぶつ飛ばす

クーズ「よし、雪かき終わ～」

そして木の家に入る

クーズ「寒いって。はやく薪、薪」

え～、薪に火を付けた

クーズ「ピチュー、寒いだろ？はい、プレゼント」

真っ赤なマフラーをピチューの首に巻く

「ピチュー！」

喜んでいるようだ

クーズ「良かつた。昨日頑張って作ったんだぜ」

そして暖かくなつた部屋でピチューと遊ぶ。ちなみに撫でたりすると蹴られる

クーズ「腹減つたな～。昼飯作るか」

昼飯を作るために厨房に行く。しかし、この時誰も知らない。強大な敵が近付いてることを

クーズ「ふう～。お腹いっぱいだな」

昼飯を食べて満足なクーズとピチュー。その時

ドーン

クーズ「！？なんだ、この音は」

急いで外にでる。村長の家あたりから煙が出ている

クーズ「嫌な予感しかしないな。ピチュー行くぞ」

「ピチュー！」

クーズの肩に乗り、赤いマフラーを靡かせながら行く

村長「・・・お前は

謎の人物「よお。腐れ親父」

村長を親父と言つた少年は髪の毛が銀髪で逆立つている。ドクロなどが模様の服や不吉なアクセサリーを着けている

村長「お前は、もうこの村と関係ないはずじゃ」

謎の人物「ざんね〜ん。俺の入ってる組織から命令されてね

村長「命令じやと？」

謎の人物「ああ。この村に住んでいる、イッシュ地方でしか見られないポケモン。フリー ジオを捕まえにな！」

少しの間、村長は何かを思い出すように止まつた

村長「あれは村の神様のような物。ナチャ、お前なんぞに渡すものか。いけ、マンムー！」

ナチャ「ヒヤハハハ。雑魚がほざくな。殺れ、ブーバーン！」

2体のモンスターが対決する

クーズ「くそ。何度も爆発が起つてるな」

必死に村長の家に行こうとしてるが、なかなか着かない

村長「くつ・・・」

ナチャ「どうしたジジイ？もう終わりか？」

ブーバーン、一匹で村長の手持ちを全て倒した

ナチャ「んじや、終わりだな。死ね」

ブーバーンの腕が村長に向けられる

謎の人物「待て――――！」

ナチヤ「ん？ まあいい。ブーバーン、かえんほうしゃ」
かえんほうしゃをするために腕から火が漏れる

謎の人物「やるーー・ピチュー、十万ボルト」

「ピチュー！」

ナチヤ「ブーバーン。避けろ」

直ぐ様、避け体勢を立て直す

クーズ「テメー。誰だ！？」

見た目から不良である

ナチヤ「・・・お前、クーズか」

クーズ「・・・もしかして、ナチヤか？」

ナチヤ「ああ」

クーズ「良かつた。で、爆発は何だつたんだ？」

ナチヤ「ククク」

笑いをこらえてるが無理だつた

ナチヤ「ハーハハハハ！馬鹿だな！クズ。俺が全部やつたんだよ」

クーズ「なつ！？」

ナチヤ「俺はあの頃の俺じやない。もつ誰にも邪魔させない！」

クーズ「・・・」

村長「クーズ」

村長がいつもより老けて見える

ナチヤ「おじおじ。まさか話していないのかよ。ありえねえな」

クーズ「村長・・・？」

村長「いつか話さなくてはと思っていたのじや。これは天気が快晴のあむ田のじじじや」

番外編から飛び出した（後書き）

ツヤガ「もう普通にこの設定でポケモンが書きたかった」

クーズ「そんなこと言つなよ。他のキャラが寂しくなるだろ」

ツヤガ「そつにえは都合上ナチャを出しました」

クーズ「まあキャラが全然違うけどね」

ツヤガ「いや皆、設定では映画を撮っている設定なので、あのキャラはナチャが作ったキャラになりますね」

クーズ「紛らわしい」

ツヤガ「あーちなみに本文にナチャが出たのは、このためだよ。ただの宣伝じゃなかつたんだよ」

クーズ「ああ、書いた後に思い付いた、といつことが文章で分かるぞ」

ツヤガ「色々大変なんだよ。小説、書くのもさ」

番外編から四苦八苦

「これは天気が快晴の日。今、村長とナチヤはある場所にいる

村長「ナチヤよ。お前も知つてると思つがこの村は地球の中心部にある」

ナチヤ「ああ。だから強いエネルギーがあると反応して天変地異が起つるんだろ」

村長「ヤツヅヤ。・・・だから」

ナチヤ「・・・？」

村長「すまないな」

いきなりマンムーでナチヤを踏み潰そうとした

ナチヤ「（山に登つたのは、このためか）・・・まあ分かつてたことだ」

マンムーの攻撃を避ける

村長「お前が生きていると、いつか世界が破滅するーそれを知つてるだろ」

ナチヤ「だからって自分の息子を殺すのかよ・・・。いけ、ブーバー！」

「ブーバー！」

村長「・・・やるしかないか」

二人の激しい争いが山で起きる

クーズ「までーーー！」

今、クーズはフリージオを追いかけている

父親「フリージオも何かを感じてここに来たのかな？」

母親「さあ？でも村の守り神よ。追い出せないでしょ」

父親「追い出す気はないよ。でも不思議でさ」

村長「終わりじゃな」

ブーバーはやられている

村長「・・・本当にすまんな」

マンマーの大きな足がナチヤに降り下ろされる

ナチヤ「（死にたくない！ーーー）」

ナチヤはまた避ける

村長「無駄じやー。」

だがその時

“ハハハハハハハハ

ナチヤ「（雪崩！？よし逃げるチャンスだ）ブーバー、お願ひだ。
かえんほうじやー。」

村長に向かつて、かえんほうじやが放たれる

村長「へつ。逃げられたか

マンムーでガードしたが居なくなつていた

村長「わしも逃げないと危ないな」

そして雪崩はそのままクーズの両親を襲つ

クーズ「お父さんー。お母さんー。」

ナチヤ「まあ、そんな訳でクーズの両親を殺したのはジジイだ

正確に言つとナチヤも関係するが気にしない

クーズ「・・・

村長「・・・クーズ

ナチヤ「ヒヤハハハハ。信頼してた奴が両親を殺して未だに話してなかつた。楽しいな！」

しゃべり方は鬼柳を参考にしてください

クーズ「・・・確かに村長は俺の両親を殺したかもしれない」

ナチヤ「かも、じゃねえ。殺したんだよ」

クーズ「だが今まで困つたことが助けてくれた。俺の両親の代わりをしてくれた。村長は充分に罪を償つた！！」

ナチヤ「ああ？それがどうした？殺したことには変わんねえよ」

クーズ「俺はお前のよつて自分の罪を認めないような奴の方が許せない！勝負だ、ナチヤ！！」

ナチヤ「は～あん。まあ、そんな考えじや無意味なんだよ。いけ、ブーバーン

「ブーバー」

クーズ「いけ！ピチュー

「ピチュー！」

ナチヤ「燃え死きな。ブーバーン、かえんぼうじゅー。」

ターゲットのピチューに腕を向ける

クーズ「ピチュー。十万ボルト！」

かえんぼうじゅーと十万ボルトがぶつかり大きな音と煙が発生する

クーズ「さらに十万ボルト！..！」

ナチヤ「ブーバーン。避ける」

煙の中から出てきた十万ボルトを避ける

ナチヤ「ブーバーン、サイコキネシス！..！」

ピチューの体が宙に浮く

クーズ「くつ」

ナチヤ「どうした？？何もしないなら殺るだけだ」

ブーバーンの腕がピチューに向けられる

クーズ「やらせるか！..ピチュー。かえんぼうじゅーと自分に、でんじは！」

ブーバーンの放たれた、かえんぼうじゅーはピチューの反発避けにより避けられる

ナチヤ「面白いな。だがお前の勝ちはない」

クーズ「（確かに。ピチューじゃ無理か）」

「ピチュー！？」

何か怒つているような感じだ

クーズ「・・・やうだな。よしピチュー。でんこいつつか」

左右に素早い動きをしながらブーバーンに近づく

ナチヤ「ハハハ！ブーバーン、ふんえん！！」

ブーバーンの肩などから火が勢い良く飛び出る

ナチヤ「なに！？」

高速で移動しているピチューがブーバーンの攻撃を避けている

クーズ「流石！ピチュー、十万ボルト！」

「ピィチュー！？」

ギリギリまで近づき十万ボルトをブーバーンに当てる

ナチヤ「ちつ。ブーバーン、えんまくー（あのピチュー。普通じゃねえな）」

「ブーバー」

えんまくにより周りが見えなくなる

クーズ「（じりあるか）」

だが考える余裕は無かつた。黒煙からブーバーンが飛び出してきた

ナチヤ「ブーバーン、かみなりパンチ」

クーズ「！？ピチュー、避ける」

「ピチュー！」

「ブーバー！」

攻撃より回避の方が少し早かつた。ピチューはジャンプして避ける

ナチヤ「まだまだ！左手でほのおのパンチ！」

クーズ「ピチュー、でんじは！」

反発によりピチューは更に高く宙に浮く

ナチヤ「ハハハハ。ブーバーン、ほのおのパンチの威力を乗せて、
かえんほうしゃ！…」

ほのおのパンチの火をかえんほうしゃに混ぜる

クーズ「つ！？威力が」

とてもピチューじゃ太刀打ちできない威力のかえんほうしゃがピチ
ューを襲う

ナチヤ「空中じゃ身動きが取れねえし、技を撃つた直後だから隙だらけだぜ」

クーズの手持ちはピチューしかいない。ピチューが負ければクーズも負けになる

ナチヤ「終わりだ！！燃えちまいな！！！」

ピチューがかえんほうじゅに当たる寸前

「ピロリロ（機械的な音）」

ナチヤ&・クーズ「！？」

れいとうビームがブーバーンのかえんほうじゅを相殺した

ナチヤ「あいつは・・」

クーズ「助けに来てくれたのかフリージオ！」

そこには村の守り神であるフリージオがいた

番外編から四苦八苦（後書き）

ツヤガ「ふう。だいぶ更新が遅れましたね」

クーズ「なんでだ？」

ツヤガ「言い訳になりますが、忙しいと他のゲームをしてたりと…」

「

クーズ「毎日少しでいいから書けよ…」

ツヤガ「いや、だつて。ね」

クーズ「分からなからな」

ツヤガ「ちえ、んじや今回の話を。ブーバーンの鳴き声が個人的に
読んでて笑いました。そしてフリーージオの鳴き声は…」

クーズ「まあ、アニメ見てないから鳴き声は難しいと思つぜ」

ツヤガ「気になら負けでいいですね。次回も番外編で…す」

それは結晶。それは冬。それは化粧。それは・・・

クーズ「フリー・ジオ！来ててくれたのか」

「ピロリロ」

クーズの顔にスリスリしてくるが冷たい

クーズ「（冷て！）フリー・ジオ。分かったから、今バトル中

親切にナチヤは待っていた

ナチヤ「まだか？」

「こちらはブーバーンの熱を使い温まっていた

クーズ「するつ！でか、ピチューも」

ピチューも寒かつたのか温まっていた

ナチヤ「おし、んじや。仕切り直しだ！」

両者位置につく

ナチヤ「そうだな。テーマにチャンスをやろう。フリー・ジオとピチ

ユー。一匹使え」

クーズ「・・・分かった。だが、そしたら負けないぜ」

ナチヤ「出来るもんならやつてみな!! ブーバーン、かえんほうじ
や」

ピチューを狙つて、かえんほうじゅが放たれる

クーズ「フリージオ。れいとうビーム・ピチュー、十万ボルト!」

技マシンの汎用技がバンバン出できます

ピチューの十万ボルトはかえんほうじゅを相殺、隙ができたブーバーンにれいとうビームが迫る

ナチヤ「ブーバーン。ふんえん!!」

至るところから炎が飛び出る。そしてれいとうビームを相殺し、ピチュー達に攻撃をする

クーズ「技と技のぶつかり合いか。ピチュー、十万ボルトで打ち消せ!!」

ふんえんの炎を、また相殺する

クーズ「フリー ジオ。ブーバーンにきりをくー!」

特殊型のフリー ジオには、これをやつてはいけない（本家のゲーム）

ナチヤ「死にに来たか！ブーバーン。ほのあのパンチ」

ブーバーンの腕が炎に包まれフリージオを殴る

だが手応えが無かつた

ナチヤ「！？消えた」

クーズ「フリージオ。れいとうビーム！！」

いきなりブーバーンの後ろにフリージオが現れる

ナチヤ「なに！？」

ブーバーンは反応出来ず、れいとうビームを喰らつ

クーズ「フリージオは氷の結晶だぜ」

説明しよう！フリージオは設定で熱すぎると水蒸気になる能力（？）を持つている

ナチヤ「なるほどな」

「ピチュー」

二人とも納得したようだ

クーズ「フリー・ジオ！そのまま、れいとうビームで決める！」

がら空きのブーバーンに、れいとうビームが襲つ

ナチヤ「甘い、甘い。ブーバーン、ふんえん」

れいとうジームをかき消し、フリージオの回りに、ふんえんが舞う

ナチヤ「水蒸氣のままじや自由自在には動けないだろ?」

ふんえんの檻にフリージオは捕まる

クーズ「ちつ。ピチュー、十万ボルト!」

ナチヤ「そりゃあ。お遊びは終わりだ!! ブーバーン、だいもんじ!
！」

かえんせつじやの比にならない威力のだいもんじがピチューを襲う

ナチヤ「ハハハハ。苦しめ……そして死んでいけ!!」

急に空が明るくなる。だが急に氣温も高くなる

村長「不味い。ナチヤの力に地球のエネルギーが反応した!」

クーズ「くつ。雪の状態から、こつきに口罷つかよ」

ナチヤ「じりや好都合だな。ブーバーン、止めの一撃をお見舞いしてやれ」

「ブーバー」

だいもんじを喰らつて動けないピチューに距離のかえんせつじ

やが放たれようとしている

フリージオは日照りによる気温上昇とブーバーンの炎で固体に戻れない

「ピッ・・・チユ」

ナチヤ「まあ、普通のピチューより強かつたぜ。楽に逝きな」

しかしピチューには必ず守ってくれる王子様がいる

クーズ「やらせるかーーーー！」

ブーバーンの元にダッシュする

ナチヤ「おーおー。何言つちやつてんの？ブーバーン、やれ」

クーズ「！？」

終わりが近いと時は早く進むか遅く進むか、両極端しかない

中間なんて存在しない。今回も例外ではない。時は遅く進む

（ピチューが殺られる。どうにかして助けないと・・・。だが俺には力がない、ピチューを助けられる力が・・・ない）

村長「こ・・・これは！？」

天気がまた変化する

ナチヤ「クーズの力に反応したか！？」

天気は一転し、あられ状態になる

クーズ「・・・フリーージオー！」おりのつぶて

小さな氷は素早くブーバーンを襲う。怯んだ所でピチューを奪還した
ナチヤ「ちっ。だが天気でビリにかかると思つたよ。ブーバーン、
一撃だ。一撃で終わらせる！オーバーヒートーーー！」

これまでにない炎がブーバーンから迸る

ナチヤ「・・・」の世の万物を凍らせる冷氣ーフリーージオ、ぜつた
いれいどーーー！」

「ブーバーー！
「ピロリロー！」

紅蓮の炎と蒼霞の氷がぶつかり合つ

ナチヤ「くつそ・・・」

フリーージオのぜつたいれいどがブーバーンのオーバーヒート呑み込
みブーバーンを凍らせる

クーズ「勝つたんだよな」

自分の家でボーッとしている

そこには氷の結晶とシンデレな雷がいる

あの戦いに勝利したクーズ。だがまだ解けてない謎はある

クーズ「」の手の話は。終わらせ方が分からないよな」

「ペチコ」「ペロコロ」

番外編から床暖房（後書き）

ツヤガ「2ヶ月投稿してませんでしたね～。色々やりたいことがありますので早く投稿出来ません

そこは謝ります。あと今口投稿したのは誰かさんが投稿したのを、たまたま見たからです

ではノシ

ものがたりの美

今、カスミとクーズ。マサキとワタルでバトルをしてくる

相手は2体。こつちは1体だが・・・

クーズ「（サンダースには電気技が効かない）なら修行の成果を見せる時が来たようだな！」

「ピチュー！」

ピチューは赤い鉢巻きを頭に巻く

カスミ「そんな装飾品付けたって無駄よ。サンダース、めざめるパワー。イーブイ、すなかけ」

タイプが分からぬ、めざめるパワーに、すなかけがピチューを襲つ

クーズ「師匠の教わったことを実戦するときだ。ピチュー、避けろ！」

ピチューは目を瞑る

師匠「目で感じるのはない！第六感、心の目で感じるのはだ！」

カスミ「！？」

大量のめざめるパワーと、すなかけがピチューを襲うが上手くかわす

クーズ「師匠の教わったことは無駄じやなかつたんだな」

「これは洞窟を抜けてすぐ」

謎の人物「おい！待つんだ。そここの少年」

クーズに話しかけてきたのは柔道着を来てている、からでおつだ

クーズ「たしかファイヤーレッドだと技を教えてくれるんだっけ
メガトンパンチとメガトンキックを教えてくれる（一人だが）けつ
こう無駄な技、教える人です

からでおつ「そんのはどうでもいい。それより、そのピチュー。
そいつは私の予想ではかなり伸びる」

クーズ「え？背が！」

「ピチュー」

ピチューは自分が背が高くなつた時をイメージしている

からでおつ「ちがーう！力が強くなるといつことだ！」

クーズ「ですよね～」

からておつ「どうだ？ ちょっと一緒に修行してみないか？」

クーズとペチューは田を合わせる

クーズ「まあ急ぎ旅じゃないので、いいですよ」

その日からクーズと、からておつ（師匠）との修行の日々が始まった。ある時は泣いたり。ある時は苦しんだり。ある時は不味くて吐きそうだったり

覚えてこるのは食事のことばかりだ

そして長い師匠との修行が終わった

クーズ「この二日間。一年間に感じた・・・」

食事が相当不味かつたらしく死にそうである

師匠「ふむ。もう教えることはないな。よしクーズよ。お前のペチューは一回りも一回りも強くなつた」

「ペチュー？」

見た目は全く変わっていない

師匠「これを持つていけ」

師匠のハチマキを貰つた

クーズ「これは？」

師匠「お前と私の修行をいつでも思い出すためだ」

クーズ「・・・師匠。 ありがとなー！」

クーズ「あの食事。 今、思い出しても吐き氣がする・・・
だがピチューは確かに強くなっている

カスミ「何が修行よ。 サンダース、 でんじうせつか

クーズ「やつてやれ。 ピチュー、 マッハパンチ！」

格闘小説になりそうな予感がする

ピチューのマッハパンチがサンダースに直撃する

でんじうせつかの威力もあって、 かなりのダメージだ

カスミ「ー? なら、 イーブイ。 だましつか

ピチューに攻撃をするフヨイントし攻撃する

クーズ「ピチュー、 カウンター」

イーブイの攻撃に反応してピチューはカウンターを放つ。そしてイーブイは吹っ飛ぶ

カスミ「何よ、あのピチュー。物理技が全然効かない」

クーズ「よし、止めた。ピチュー、十万ボルト！」

イーブイに放たれる

カスミ「・・・！？まだ勝ち田はある。サンダース、イーブイを守つて」

サンダースの素早さは異常だ。イーブイを守るため十万ボルトを受ける

クーズ「くつ。ちくでんか」

カスミ「見せてあげるわ。イーブイのとつておきの技を！イーブイ、とつておきー！」

駄洒落っぽい言葉を言いながら攻撃する

クーズ「ピチュー、避けろ！」

また目を瞑る

カスミ「させないわ。サンダース、十万ボルト！」

ピチューはとつておきの技に集中してたため十万ボルトを喰らう。

そして集中力がされた

クーズ「！？ピチュー」

イーブイのとつておきが直撃する

「ピチュー」

カスミ「集中しないと避けられないよつね。さらに集中できるのは一つの技だけ」

クーズ「（完全に攻略されたな。びつする）」

ピチューは辛うじて立つ

カスミ「終わりよ。イーブイ、とつておき。サンダース、十万ボルト」

「ブイー」「サンダー！」

「匹の技が放たれようとした時

ワタル「カイリュー。はかいこつせん」

カスミ「！？」

ワタルのカイリューの、はかいこつせんで「匹は一気に戦闘不能になる

ワタル「遅くなってしまったな。クズ君、後始末は僕がやるよ。だ

から出でていこよ

クーズ「いや、でも」

ワタルはマサキを抱えていたがマサキは原型を止めてない

クーズ「（ああ、やばいな）わかりました」

そしてピチューを連れて急遽ジムを出た

クーズ「あ！バッチ」

確認したらいつの間にか手に入れている

クーズ「ホント、このゲーム。よく分からぬよな」

そしてクーズはポケモンセンターに行き、次の町に行くのを備えた

ものがたりの美（後書き）

ツヤガ「ふう。疲れました。気分で投稿するので次はいつになるかな」

クーズ「ていうかピチューを強化しそぎじゃないか？」

ツヤガ「大丈夫です。ドジヨツチと一緒に重要な時でしか補正は効かないから」

クーズ「・・それならいいけど」

ものがたりの独裁

2つのバッヂを手に入れたクーズ。クリアしたら一体何が起こるのだろうか

クーズ「ドジョウチ。みずのはどう!」

トレーナー（男）「僕のマグマラシが」

最後のトレーナーを倒しクチバシティに着いた

クーズ「どうするか。自転車を先に入手するか。もう船に行こうか

クーズが悩んでいると

ドンッ

当たった人「すいません」

クーズ「ああ、大丈夫ですよ」

当たった人は顔を隠すようにフードを深く被っている

クーズ「?。よし決めた。自転車を行こう

♪ポケモン大好きクラブ♪

男「わいのピッピは最高やわ~」

女「うちのラルトスが最高よね～」

男「いやピッピやー。」

女「ラルトスよー。」

低脳な喧嘩が始まっているが皆、気にしている

大好きクラブの会長「おや？君は家のクラブに入りたい人かね？」

クーズ「いや。違うんですけど」

会長「じゃあ、私の話を聞きに来た人かい。しょうがない私が愛してやまないポケモン達の話をしよう。まず話すポケモンはエレキブルだ。家のエレキブルはニックネームが、エコですう、という面白い名前なんだが、こいつが三色パンチとクロスチョップを覚えていてな。確かに個体値は考えてないが努力値は、しつかり振つてある。意外と大体のポケモンに対して対処できるから対策を練つていない相手なら、そこそこ戦えるのだよ。次はピカチュウの話だ。家のピカチュウは配信ピカチュウで技を1つもえていないんだ。だから技がDP時代のサトシのピカチュウと一緒になんだ。でんこうせつか十万ボルト、アイアンテール、ボルテッカー。正直、あんまり使えないが攻撃と素早さは√にしてあるぞ。持ち物はでんき玉で、相手に抜かれると一撃で乙る可愛いやつじゃ。そして・・・」

（一時間後）

「おや。もうこんな時間がか。悪いの長話をじてしまつて」

クーズ「あ、はい。大丈夫です（マシンガントークすぎるぞ）」

会長「聞いてくれたお礼をしなくてはな」

ひきかえけんを貰つた

クーズ「ありがとうございます」

そして直ぐにハナダで自転車を貰つてきた。そして今、船に乗る所だ

船員「よし、いいぞ。入れ」

クーズは押されるように入った

クーズ「あて船長に会いに行くか」

船長に会いに行くために階段を上る。だが少し外が騒がしい

クーグ「なんだろ？」

司会者「レディースエンデジョントルメン。皆、今日は盛り上がる

クーズ「・・・なんだこれ？」

司会者「もう一度言つけど、この大会のルール説明だ。タッグによるダブルバトルだ。ぼっちじゃ参加出来ないから、気を付ける！参加チームは無制限どんどん参加してくれー！」

クーズ「大会か。優勝したらマスター ボールとかなら参加するんだけどな」

司会者「優勝者にはマスター ボールが送られるぞ。頑張つていこう！」

その瞬間、クーズは動く。目で見えない素早い行動で隣にいた人を無理矢理連れて参加申し込みをした

そして事後

クーズ「すいません。いや、賞品がマスター ボールだつたもので」

隣の人「あら？私の熱烈なファンだと思つたら、違うのね」

クーズ「！？あ、あなたは」

水色のロングヘアに大人らしい服装。ポケモンバトルは、かなりの強敵

クーズ「（カ、カリンさんだ――！）」

カリン「何、驚いてるのよ」

説明しよう！カリンは金銀に出てくる四天王の1人で、あくタイプを使う。HGSSの強化版のブラッキーは本気で耐久が鬼畜だ

クーズ「いいい、いや何で貴方が！？」

カリン「私がここに居たらいけない理由があるかしら？」

クーズ「ないですけど」

カリン「じゃあいいじゃない。それ以上の深追いは駄目よ」

クーズ「分かりました！」

作者がカリンを好きなので優遇されています

謎の人物「おーい。カリンさん」

カリン「あら？ 連れが来たわね」

クーズ「連れ？」

イツキ「急に行かないで下さいよ」

クーズ「なんだ。イツキか」

イツキ「なんだ、つて。君！僕は四天王の一人、イツキだぞ」

クーズ「いやだつて最初じやん」

グサツ。心に矢が刺さつたようだ

イツキ「でも四天王は四天王だから」

クーズ「HGSUで強化されても弱かつたよね」

グサツ。またまた矢が刺さつた

イツキ「き・・み・・言葉は選ぼうね」

クーズ「実際、経験値稼ぎにしかならないよね。あとネイティオの鳴き声が聞けるくらいか」

グサツ、グサツ。もう心に矢が沢山。そしてイツキは落ち込んだ
イツキ「・・・どうせ僕なんて雑魚で四天王じゃなくともいい存在
なんだ」

カリン「あらら。イツキが落ち込んじゃったわね」

クーズ「メンタル面が弱いのに、よく四天王をやれるな・・・」

カリン「まあいいわ。イツキと参加するつもりだつたけど、クーズ
君と参加するから丁度いいわね」

全くイツキを励ます気がない

司会者「そろそろ締め切りの時間だー！ではもう締め切るぞ。・・・
今、締め切つたー！ではサントアンヌ号タッグ大会、始めるぞー！

！」

人々「オオーーーー！」

クーズ「オオー！」

カリン「ワー！。フフフ」

イッキ「僕なんて、僕なんて、僕なんて」

これから船の上で生死を掛けた壮絶な戦いが始まるとは誰も知らなかつた

ものがたりの独裁（後書き）

ツヤガ「気分が乗ってる時に投稿しないとね。またやる気無くすから

クーズ「まさかのカリンさんが出てきたな

ツヤガ「イツキはよくキャラが分からなかつたからテキトーにしましたね。あとこの前「バッジ」を「バッチ」って書いてたかも」

クーズ「確認しろよ」

ツヤガ「面倒だし、そこはスルーしてくれると信じているから

クーズ「生死を掛けた戦い。どんな状況になるのやら

ツヤガ「う~ん。勢いで書いたから上手く、まとまらないと思つよ

クーズ「・・・」

ものがたりの焼き餅

司会者「さあ。順調に勝ち進み、準決勝まで来たのは、この四チームだ！」

四チームの名前が出る

司会者「前回の優勝者。パパとママの愛は無限回路…ラブラブカッフルだー！」

パパ「今年もママとの愛を爆発させます！」

ママ「もうパパったら

司会者「ヒュー、ヒュー。ラブラブ！」

クーズ」（司会者が仰ぐなよ）

司会者「次のチームは今大会初出場。夢は地球侵略…？イタイ一人の登場だー！」

イタイ一人の一人（男）「うー。僕は出たくないって言ったのに…。
・」

イタイ一人の一人（女）「いいじゃない。他の一人には頼めないし

司会者「さあて次は。船には俺たちが居ないと駄目だろ？船員の二人だー！」

船員A「よつやく、ここまで、これたんだな」

船員B「ポケモンを育てたかいが合つたぜ」

司会者「お~っと。既に一人は泣いているぞ」

クーズ「次は俺達か」

カリン「そうね」

司会者「主人公と四天王の最強コンビー? グズとカリン様だー！」

クーズ「え? ちょ。呼び名の差が酷くない」

カリン「そう? フフフ」

カリンの裏がちょっと見えた瞬間だった

司会者「組み合わせはカツプルとイタイ一人。船員とカリン様だー！ 一度に2つのバトルをするぞ。両方見逃すな」

人々「オオーーーー！」

カリン「即効で終わらせるわよ。クーズ君

クーズ「分かつてます！」

審判「両者。前へ」

カリン「いくわよ。いきなさい、ヘルガー」

クーズ「よし、いってこい、カモネギ」

「ヘル!」「・・・カモ」

船員A「毎日荷物運びで鍛えた筋肉を見せるんだ。ゴーリキー」

船員B「こいつへの愛なら負けない。いけ、ゴマゾウ」

フィールドにヘルガー、カモネギ、ゴーリキー、ゴマゾウが並んだ

審判「試合開始」

クーズ「先手必勝! カモネギ、こいつをくじだつ、からの、いあいぎり」

「こいつそくいじうの威力が乗つたといあいぎりがゴーリキーを襲う

船員B「ゴマゾウ。ゴーリキーを守るんだ」

カモネギの攻撃をゴマゾウが守る

船員A「ゴーリキー。クロスチョップ」

がら空きのカモネギにゴーリキーの攻撃が襲う

カリン「させないわ。ヘルガー、ふいっせ」

いつの間にか「ヨーリキー」の後に居たヘルガーのふくつかが「ヨーリキーに当たる

船員A「ぬいづか。B、一度体勢を建て直すぞ」

船員達は体勢を建て直した

司会者「おーーとーーーちらは一撃で試合が決まってしまったーーー！」

クーズ「ーーーぐらなんでも早くないか」

イタイ人（男）「もう知りませんよ。ホント」

イタイ人（女）「いいのよーーじつせ何でもアリなんだから」

司会者「圧倒的な強さを見せたイタイ組。これは決勝戦が楽しみだーーー！」

クーズ「（どんなポケモンを使ったんだ？）いや、今はこっちに集中しよう！」

船員A「ヨーリキー、しんくわは」

ヘルガーをしんくわが襲う

カリン「かくとうタイプだから、効果は抜群ね。じゃあ、ヘルガー。ほえるーーー！」

ゴーリキーはヘルガーのほえるで怯む

クーズ「！？ しんぐうはが」

しんくうはがヘルガーに当たる。しかしこれはゴーリキーに突っ込む

カリン「ヘルガ！」。かみつく

船員B いや、やうやくやるが。
船員A ハヤシ。いやがる。

ケース一かモノサ。つばめがえし！」

ゴマゾウとカモネギの力は同等である。そしてゴーリキーにヘルガーのかみつくが当たる

カリン「フフフ。ヘルガー、かえんほうしゃ！」

船員A 「！？」

ゼロ距離のかえんほうしゃがゴーリキーを焼き尽くす。だがヘルガーにもかえんほうしゃの炎が当たる

カリン「ヘルガーの特性はもらひ。さつきのかえんほうしゃの炎を受け、ほのおタイプの威力が上がるわ」

クーズ「（鬼だ・・・）」

カリン「ヘルガー。かえんほうしゃーー。」

船員B 「ゴマゾーク！」

審判「ゴーリキー、ゴマゾウ。戦闘不能。よつて勝者カリン様」
司会者「こちらも決まったーーー！圧倒的な力を見せた2チーム。果たして今回の大会を優勝するのは、どっちだー？」

クーズ「俺の出番ありませんね」

カリン「いや、次の相手は相当な曲者よ。しつかり頑張つてね」

次の対戦チームを睨む

イタイ男「み、見られてる」

イタイ女「何、ビビッてんのよ。男でしょ！もつとシャキッとしなさい」

イタイ男「で、でも。変にシャキッとしてると恐い人に絡まれたりするから」

イタイ女「はあー。ホント、ろくな男が居ないわね」

司会者「さあて、いよいよ。決勝戦の開幕だー！両者、ステージに出てきた！」

審判「両者。前へ」

カリン「そうだわ。戦う前に聞いておくけど名前は何かしら？」

イタイ男「は、はい。僕はキイーって言います。『テフロ！ いで』

イタイ女がキイーの頭を軽く殴った

イタイ女「何、変なことまで言つてんのよ。・・私はマナカよ」

クーズ「（やつきキイーが言いかけた言葉。ビニカド）」

カリン「やつ。悪いわね時間とらせちゃつて。こきなやつ、ブリッキー」

キイー「頑張つて、テッカーン」

クーズ「よし。いつでここ、ドジヨウチ」

マナカ「見せてあげる。いけ、ヒルレイド」

司会者「さあ。試合が始まつとしているやー。」

審判「試合・・開始ッ！」

ものがたりの焼き餅（後書き）

ツヤガ「意外と戦闘が少ないですね。もつと増やしていきたいです。そして今一番悩んでいるのは、ポケモンを増やすのと、デジヨシチの進化する場所ですね」

クーズ「デジヨシチの進化はナマズンだな」

ツヤガ「いつ進化させようか。そもそも、ずっと使うのか。サトシのバタフリーように【バイバイナマズン】とかで別れを作るべきか」

クーズ「え？伝説を作ってきたデジヨシチをスタメン落ちにせらるのかよ！？」

ツヤガ「微妙ですね。覚醒タイミングを早くし過ぎたから調整しないと、いけないし」

クーズ「そちらへんは作者の技量で、どうにか」

ツヤガ「あるわけないでしょ」

クーズ「ですよね」

ものがたりの花嫁修業

謎の人物「ちつ、あいつら。自分勝手が」

今、決勝戦が始まった

マナカ「エルレイド、サイ「カツターパー！」

いきなりドジョウツチを狙いにきた

キイニ「テツカーン。じつそくじビリ

クーズ「（テツカーンは後々、面倒になるな）ドジョウツチ。避けて、みずのはどう！」

ヌメヌメの力を使い避けてエルレイドにみずのはどうを放つ

マナカ「向かい撃て！」

まさかの技を使わずにみずのはどうを打ち消す

カリン「あらあら、ブラッキー。だましつか

エルレイドの背後からブラッキーが襲う

だが、あまりダメージは無いようだ

マナカ「キイー。まだ？」

明らかに不機嫌そうだ

キイニ「待つてよ。テッカーンだつて頑張つてゐんだから」

クーズ「ドジョウチ。テッカーンにどりあそび！」

テッカーンは泥を浴び、遅くなる

マナカ「ちつ、つせいわね。エルレイド、ブラッキーに、かわらわ
り！」

カリン「そのまま受けで、しつペがえし！」

エルレイドの強烈な一撃がブラッキーに当たるが耐久力は並みじや
ない

そのままブラッキーのしつペがえしがエルレイドを襲う

カリン「しつペがえしは技を受けた後に使うと威力が上がるわ」

威力の上がった、しつペがえしはエルレイドを吹っ飛ばす

キイニ「テッカーン。きつわく」

「ドジョウチ」

クーズ「...? ドジョウチ」

一瞬だった。いつもくじょうと皿身の特性、かそくで最速になつた
テッカーン。その、きりさくはまず見えない

マナカ「100m走したら一番遅そうなのにポケモンは素早いと言
われるほどね」

キイニ「ちょっと。変な肩書き付けないで下さいよ」

カリン「・・・ブラッキー。エルレイドにふいつち」

立ち上がったばかりのエルレイドを狙う

マナカ「そろそろ力、出してもいいわね。エルレイド、クロスチョ
ップ！」

突然、エルレイドの動きが早くなる。そしてブラッキーは攻撃を喰
らい、吹っ飛ぶ

カリン「くつ。今までは、お遊びだったってことね」

マナカ「そうよ。終わりにしてあげる。エルレイド、クロスチョッ
プ！」

キイニ「テッカーン。シザークロス」

ダブルなクロスがブラッキーを襲う

カリン「（流石にキツいかもね）」

ピンチの時に泥沼の覇者は覚醒する

クーズ「ジヨウチーだくじゅう！」

ブラッキーの前を泥を含んだ波が一匹を巻き込みながら通りすぎる

キイー＆アモロ・マナカ「！？」

「ジヨウチー！」

誇りしげにジヨウチは立つ

カリン「ジヨウチ、ナイスよ。ブラッキー、つきのひかり」

ブラッキーのダメージが回復していく

マナカ「やられるとか！…ヒルレイド、サイコキネシスを自分にかけて、ブラッキーに突っ込みな！」

「ヒルッ！」

サイコキネシスの力を借り異常な早さでブラッキーに突っ込む

マナカ「インファイト！」

カリン「あくのはじづ！」

「ヒルッ！」

「ブラッキー！」

一匹の技がぶつかり爆発する

マナカ「・・・」

カリン「・・・」

審判「エルレイド。戦闘不能」

カリン「やつたわね」

クーズ「よし。相手はあと一匹。！？」

審判「ブラッキー。戦闘不能」

カリン「！？」

マナカ「キャハハハ。キイーのテッカーンのこと忘れてたの？」

そこには爪がさらに鋭くなつたテッカーンがいた

カリン「あれは・・・つるぎのまい」

キイー「ふう。急かすから本調子で戦えなかつたよ」

今、テッカーンは素早さ、攻撃力共に最高補正

マナカ「さつきの爆発で上手く時間を稼げたわね」

テッカーンは爆発の最中につるぎのまいをしていた

クーズ「（ドジヨッちでのテッカーンを倒す手立ては・・・）」

キイニ「終わりにしてもいいかな？」

マナカ「私に聞いてないで早く殺りなさいよ」

狙いがドジヨッちへと変わる

クーズ「・・・ いける！ ドジヨッち、 みずあわび、 どうあわび！」

一気に2つの技を指示する

キイニ「あ～。せっかくテッカーンを拭いたのに、また拭かんきやだ」

実は爆発の時に汚れていたテッカーンを拭いていた

キイニ「まあいいや。テッカーン、シザークロス！」

テッカーンが攻撃をするが、まだみずあさびとどうあさびを続けている

カリン「クーズ君！」

クーズ「・・・」

そしてテッカーンのシザークロスがドジヨッちに当たる。だがドジヨッちは止めない

マナカ「キャハハハ。もつ諦めちやつてゐよ。あの子」

キイニ「よし終わりだ！もう一度、シザークロス！」

テッカニンは一発目のシザークロスを放つ

クーズ「ジヨッチ！ギリギリまで引き付けて、だくりゅう！」

田には見えない早さだがポケモンは人間には持っていない感覚がある

ドジヨッチのような魚は危険が察知できるほどだ

キイニ「無駄だよ。僕のテッカニンの速さについてこれるわけ・・・！？」

テッカニンの攻撃が当たる寸前にドジヨッチは、だくりゅうを放つ

カリン「！？さつきの遊び達は、だくりゅうの威力を上げるためね」

クーズ「終わりだ！いけ、ドジヨッチ！」

「ドジヨーーー！」

威力の上がった、だくりゅうはテッカニンを呑み込む

キイニ「テッカニン！？」

そして、だくりゅうが引いた時

審判「テッカニン、戦闘不能。よつて、勝者。クーズとカリン様チ

—
△
—

人々「ワ――――！」

カリントやつたわね」

ケース・ヨシヤアリ！ありかどなトシミツチ

「シーザー・ジニアス」

ドジヨツチの見た目が前より凛々しくなった気がするクースだつた

キイ二 僕達が負けた・・・」

「ナガ……あー」 あわかバスター号

「お掛けしてお撃ちえ！？」じきに、

謎の人物 さあて お前に話を聞くか

二人の後ろにお怒りな人がいる

マナカ一サニタニヤニタねね

そしてズルズルと引き摺られながら拐われる

キイニ「だから嫌だつて言つたのに」

マナカ「まあ、諦めなさいつて」

クーズ「（あー！キイーから聞くの忘れてた）」

カリン「どうしたの？」

クーズ「あ、いや、何でもないです。（まあいいか）」

そして優勝商品であるマスター ボールを貰う

司会者「おめでとうございます。マスター ボールです」

カリン「ありがと」

クーズ「・・・あれ？俺のは

カリン「？商品は一人に贈られるのよ。もちろん私にくれるわよね
？」

悪魔の尻尾が見え始める。流石、あくタイプ使い

クーズ「・・・は、はい。いいです、あげます」

カリン「フフフ。ありがとね。でも私は貴方が好きよ」

クーズ「！？」

カリン「やっぱり自分の好きなポケモンで勝てるように頑張る人は
良いポケモントレーナーよね」

クーズ「ですよね。（泣きたい。やっぱりか）」

何か別のこと期待していたクーズ

カリン「じゃあね～」

クーズ「まあ、会いましょう」

イツキ「僕なんて」

カリン「いつまで、落ち込んでるよ」

最後はイツキを励ましていた。だがクーズはあのあと突き落とすの
だろうと密かに思っている

クーズ「よし。船長に会いに行こうか」

ものがたりの花嫁修業（後書き）

ツヤガ「ふう。脱線し過ぎだね。気を付けないと」

クーズ「まあ、ゆっくり進もうぜー。」

ツヤガ「ドジヨシチの特性は鈍感にしようが危険余地にしようが」

クーズ「2つもある気がするけどな」

ツヤガ「確かに今回で危険余地。前の話のクチート戦で鈍感みたい
の出てるのよね」

ものがたりの咲かない花

船長「うげえ～。ぼげえ～」

船長は船酔いでリバースしている

クーズ「（銀 がゲロネタやつてたから大丈夫だよな）」

「こちらも大人の事情つてやつかな

船長「すまないの。船長なのに情けない」

クーズ「大丈夫ですよ。船酔いしても貴方は貴方で、船長です」

ちょっと決めた言葉を言つ

船長「懐かしいの。孫に似たような台詞を言われたわい」

クーズ「え？」

船長「あれば、わしが船長の成り立てだつたころじやな」

船長「出発進行！」

汽笛が鳴り、船が出発する

今日は孫を連れて船に乗っている。孫はやんちゃな時期だ。かくれ

んぼをして困らせている

船員A 「ん? 船長の孫のタカシ君じゃないか」

ワンリキーと一緒に仕事をしていた船員Aに見つかる

タカシ 「もつ、見つけないでよ。また隠れなきゃじやん

船員A 「ハハハ。『ごめんね。でも船長が心配してるから、あんまり
かくれんぼしてちゃ駄目だぞ』」

タカシ 「大丈夫だよ。おじいちゃん、優しいもん!」

ほぼ何でも許される子供は楽でいい

船長A 「さうかい。じゃあ僕はワンリキーとあっちで仕事をするか
らね」

そう言つて何処かに行つてしまつた

タカシ 「よし、次はどこに隠れようかな」

船長 「ふう~、子供は無邪氣でいいのう

そのじろい船長は頑張つてタ力を探していた

（タ食）

船長「誰か、家のタカシを知らないか?」

船長が夕食を食べている船員達に聞く

船員A「匂頃、倉庫で隠れてたのを見ましたよ」

船長「そのあとでタカシを見た者は?」

誰も居ない。船長は、てっきり夕食を食べに食堂に向ひていた

船長の顔は真っ青になる。その変化に気がつき船員達も焦る

船長「皆、すまない。タカシを探してくれないか

全員、食堂を出てタカシを探してくる

クーズ「その頃から信頼度が高かつたんですね」

船長「やうじやの。船員達の信頼が無いと船長は務まらないからな」

船員B「船長……居ました」

タカシは密室のベッドで寝ていた

船長「……、ありがと。後は任せなさい」

船員達は食堂に帰つていった

船長「全く、誰に似たのだか」

タカシ「ん？・・・うん」

いつのまにか船長室のベットで寝ていた

タカシ「あれ？ いつのまにか寝ちゃつた」

周りを見渡す。船長は外にいた

タカシ「おじいちゃん！」

船長「タカシ。起きたか。全く、あんな所で寝ては駄目じやぞ」

ちよつと怒り気味で言つ

タカシ「いめんなさい」

ショボーンとなつて反省した様子を見せる

船長「・・・タカシ。空を見ていろん」

空には無数の星が沢山ある。周りは暗いので、よく見える

タカシ「すつ〜〜〜！」

タカシの目も小さな星の仲間入りになつた

船長「ワシは小さいころよく星を見るために上を見ていた。そのころから辛いことがあつたら星が無くても上を見上げていた」

何か虚しい感じの空気が流れる

船長「今は違うの。こつも下ばかりじゃ。何があつて変わったんだうづか？」

タカシ「おじいちゃんは、おじいちゃんだよ。何も変わってないよ。ほり、今だって僕と一緒に星を見てるでしょ」

無邪氣に言つ言葉が心に響くことがある

船長「……やじの」

船長「その口からワシはまた空を、上を見るよつになつたの」

クーズ「だから俺が来たとき、外を見てたんだすか」

船長「そうじゃ。ふむ、話込んでしまつたの。おれに、これを使ひうづ

ひでんマシンのーを貰つた

クーズ「ありがとうございます」

船長「お主も何かあつたら上を見るとこい。解決するかもしれんか

クーズ「やつやせてもいいこます」

何かを考えさせられるよつになつたクーズ

そして船を出た

クーズ「よしじムに行くか」

しかし重要なことを思い出す

クーズ「いあいきつてカモネギが覚えてるじやん・・・」

今さらである。斬れそうなウソッキーを斬つてマチスがいるジムへと進む

クーズ「失礼しまーす」

自動ドアが開きジムに入る

マチス「イエーイー監、元氣かーい?」

密「イエーイー」

クーズ「・・・」

どうやら今はマチスのバンド【アストロイン】のライブをやつてい
るらしい

クーズ「名前、しょぼ。それより、あのメンバーは」
かなりの有名人が集まっている

マチス「メンバー紹介！まずギタリストのカゲツ！」

ホウエン地方の四天王の一人

カゲツ「よろしく！」

マチス「次はベーシスト！ウツギ博士！」

金銀時代の博士

ウツギ「が、頑張ります」

マチス「続いて、ドラマの『デンジだ！』

シンオウ地方のジムリーダーの一人

デンジ「みんな、よろしく！」

マチス「そして、最後！ボーカルのマチス！」

客「イエーイ！」

全員のテンションはMAXだ

クーズ「とりあえずウツギ博士が浮いてるよな

そして終わるまでバトルが出来ないのでクーズも終わるまでライブを楽しんだ

ものがたりの咲かない花（後書き）

ツヤガ「戦闘が無いWW。次回はマチスとの対戦ですね」

クーズ「船長はあれ、何歳だ？」

ツヤガ「女人に歳を聞くのは失礼だよ」

クーズ「いや、船長。女じゃないし！」

ツヤガ「常識に囚われていては分からぬよ」

クーズ「何つ！」

ツヤガ「眠いから寝させるんだ！」

クーズ「会話が成り立つてないからな」

ツヤガ「皆、お休み！」

ものがたりの金銀財宝

ライブは大盛り上がりで夜遅くまで続いた

マチス「皆、センキュー。今日は最高に樂しいぜ」

客「アンゴール！アンゴール！」

クーズ「え、ちよ。皆、体力有りすぎ」

すでにクーズはバテている

マチス「じゃあ期待に答えるぜー。」

（翌日）

クーズ「やっと終わった・・・」

観客はライブが終わり帰った。クーズはこの世の終わりのようないをしている

マチス「どうしたんだい？」「ライブが終ったのに居るなんてかなりの *fan* だね！」

発音よく *fan*。皆も発音よく *fan* おつ

クーズ「いや。 *fan* じゃなくてジムの挑戦者です」

マチス「〇九〇。そうだったんですね。よしー受けてたちます」

クーズの本音はバトルより休みたいと思つている

審判「両者、前へ！」

マチス「クーズ君。ミーー負けたらライブのチケットを貰つんだよ」

クーズ「まあ、いいですよ（意外と楽しかったからな）」

マチス「カモン。マルマイン！」

クーズ「よし。いつでこ、ドジヨッチ

二人のポケモンが場に出でくる

審判「試合開始！！」

クーズ「先手必勝。ドジヨッチ。マグニチュード」

「ドジヨー！」

マグニチュードは

マチス「マルマイン。でんじふゆ！」

電気の力を使い、マルマインは地面から浮く

クーズ「ぐつ。これで地面タイプの攻撃は喰らわないか

マチス「やつでーす。マルマイン、じゅがるー。」

でんじふゅうの力を使い上から、のし掛かるよつこじゅがるを使う

クーズ「ドジョウチ。回転が止まるよつこ、みずてつまつ」

回転の向きの力と逆方向に力を働く。そしてマルマインは完全に停止した

クーズ「よし。ドジョウチ。アクアテールで上にぶつ飛ばせー。」

ドジョウチはジャンプレアクアテールでマルマインを攻撃する

マチス「マルマイン。でんじふゅうを解くんだ」

でんじふゅうが無くなるがドジョウチにぶつ飛ばされる

クーズ「よしドジョウチ、みずあそびとじゅあそび」

タッグ大会でやつた技を使つ

マチス「マルマイン、じゅがるー。」

マルマインは重力にしたがい速度を上げながら転がり落ちる

クーズ「ドジョウチ！だくじゅう」

ドジョウチのだくじゅうとマルマインが衝突する

マチス「マルマインの基本は爆発テース。マルマイン、大爆発！」

「ジジ四！？」

だくじゅうの中にいるマルマインが爆発し砂煙が舞う

審判「・・・マルマイン、ドジョウチ。戦闘不能」

クーズ「くつ。ドジョウチだけで勝つつもりだつたが」

マチス「チツチツチ。まだまだ甘いよ、クーズ君」

マチスの狙いは弱点である地面タイプを潰すためにマルマインを持つている

マチス「さあ、ここからが本番さ！カモン、パチリス」

初めて見たときピチューの色違いと思ったのは作者だけでいい

クーズ「よし。いってこい、カモネギ！」

カモネギとパチリスの相性は悪い

マチス「おれ。これは余裕ですね。パチリス、スパーク！」

パチリスが電気を帶びながらカモネギに突っ込む

クーズ「カモネギ。はがねのつばを！！」

「・・・カモ」

力モネギの翼が鋼のように硬くなる。そしてパチリスに攻撃し、吹
つ飛ばす

マチス「流石ですね。タイプ弱点だけで勝ち負けは決まらないよう
だ」

だがマチスの笑みは治まらない

クーズ「！？、せいでんきか」

パチリスの特性、せいでんきで力モネギは麻痺状態になる

マチス「チャンスです。パチリス。ほうでん！」

いくつもの電流が迸る。そして力モネギに当たる

「・・・力モツ」

弱点の電気技で苦しい表情を見せる力モネギ

クーズ「あ！ そうだ」

何かを思い出しべックの中をあたる

クーズ「ちやつちやらしちやつちやぢやー。長ネギー」

BGMはクーズのセルフサービスだ

クーズ「力モネギ！ 新しい長ネギよー！」

どこかのアンパン男の近くにいるバターな人の台詞に似ている

そしてクーズが長ネギを投げてカモネギがNice catchする。発音よ／＼y

クーズ「よし。これでカモネギは元気倍々、カモネギンだぜ！」

カモネギはカモネギンに進化した

マチス「流石ですね。カモネギを進化させるなんて」

ただ単にカモネギに新しい長ネギを持たせただけだけど進化らしい

クーズ「終わらせるぞ。カモネギン、エアカッター！…」

だがパチリスが動かなければ当たらない

マチス「何の意味が」

エアカッターの風が体重の軽いパチリスを吹き飛ばす。その方向にはカモネギンがいる

クーズ「いけーー！カモネギン、はがねのつばさー！」

マチス「なるほど。だけど負けてられませんね。パチリス、ほうでん！」

カモネギンの、はがねのつばさとパチリスの、ほうでんがぶつかり合い爆発を起こす

そして砂煙が引いたころ

審判「パチリス、戦闘不能」

クーズ「よつしゃー！ナイスだ。カモネギン」

「・・・カモ、ン？」

どんな鳴き声をすればいいのか、よく分かつていな

マチス「強いですね。ですが私のポケモンの最後は手強いですよ。
カモン！ライチュウ」

「ライー！」

ピチューの最終進化系ライチュウが出てきた

クーズ「ならカモネギ。戻れ。いけ、ピチュー！」

いい加減力モネギンは止めた。そしてピチューが出てくる

「ピチュー！」

「ライー！」

両者に「らりみ合」。そして試合が始まる

ものがたりの金銀財宝（後書き）

ツヤガ「なんかマチスの台詞が安定してないね。ていうかマチスってどんな喋り方だっけ？」

クーズ「そこから黙目なのかよ」

ツヤガ「まあいいです。カモネギンは遊びなので進化してませんよ」

クーズ「まあ、進化したらそれはそれで楽しそうだけだな」

ツヤガ「マチス戦が終わったら新しい仲間が増えます、多分。期待していく下さい」

ものがたりの一本杉

クーズとマチスの最終決戦が始まると、

クーズ「ピチュー、十万ボルト！」

マチス「ライチュウ、十万ボルト！」

いきなり二人同時に指示を出す

そして、二匹の十万ボルトが当たり爆発する

二匹のパワーは互角だった

マチス「ピュー（口笛）。ピチューで互角ですか。ライチュウ、の
しかかる！」

「ライ！」

ライチュウは飛び跳ねてピチューにのし掛かる

クーズ「ピチュー、なみのり！」

「ピチュー！」

マチス「！？」

実は船を降りた後

クーズ「そういうえば、なみのつピカチュウが居たよな～」

海を見ながら、ふと思いつく

そしてモンスターボールに手を差し伸べピチューを出す

クーズ「ピチュー。海は好きか？」

「ピチュー？」

よく、わからないらしい

クーズ「そ、う、か。・・・。な、ら、！海で特訓だ――――――！」

「ピチュー！」

結局、ピチューの意見なんて聞かなかつた

クーズ「楽しかったな。うんうん」

すでに思い出に耽つている

マチス「（ピチューになみのりを覚えさせるクーズ君、いや、覚えるピチューの方が凄いのかな？）」

ライチュウは空中で何も出来ずなみのりを喰らつ

クーズ「よし。そのまま終わらせるぜ。十万ボルト！」

十万ボルトが放たれる。しかし見てるだけのマチスではない

マチス「ライチュウ。ひかりのかべ！」

ライチュウの前にひかりの壁が出来る。これにより特殊技が効きにくくなつた

マチス「これで十万ボルトも大丈夫です。ライチュウ、続けてチャージビーム！」

ピチューの十万ボルトを受けるがひかりの壁で、ほとんど喰らわない。そしてチャージビームがピチューに放たれる

チャージビームの効果でライチュウの特攻が上がる

クーズ「なら避けてから。ピチュー、マッシュパンチ」

素早い動きでチャージビームを避け、マッシュパンチをライチュウに
お見舞する

マチス「近くに来たら危ないですよ。ライチュウ、のしかかり！」

ピチューの上にライチュウがのし掛かる

クーズ「ピチューに物理技は危ないですよ」

マチスの台詞を言い返す

クーズ「ピチュー、カウンター！」

上にのし掛かつたライチュウをカウンターで吹つ飛ばす

マチス「！？」

クーズ「ピチュー。なみのり！そして十万ボルト！」

「ピチュー……」

ピチューのなみのりに十万ボルトが混ざり威力が増す

マチス「まだでーす！ライチュウ、十万ボルト！」

なみのりに十万ボルトを放つ

もしこれでなみのりを撃ち破れば大丈夫だが、できなければ、自分の十万ボルトで更に威力が上がった、なみのりを喰らう

クーズ「（チャージビームで特攻が上がっている）」

少し心配そうなクーズ

そして結果は・・・

「ピチュー……！」

ピチューの勝ちであった

マチス「！？」

ライチュウは十万ボルトを含んだなみのりを喰らう。ひかりの壁があるが、関係ないほどの威力だった

審判「ライチュウ、戦闘不能！よつて勝者、クーズ！」

クーズ「よしゃあーありがとな。ピチュー！」

「ピチュー！」

クーズは少しでもピチューのことを信用出来なかつた自分を憎んだ

クーズ「ああ。ピチューは俺の最高のパートナーだよな」

「ピチュー？」

しかしボールから力モネギとドジヨウチが出てきて騒ぐ

「・・・カモ」「ドジヨウ」

クーズ「ごめん。ごめん。お前らも俺の最高のパートナーだよ」

謎だらけで不安になつてゐるクーズだが仲間が居れば大丈夫だと思つた

マチス「流石ですね。これがバッジです」

オレンジバッジを手に入れた

クーズ「ありがとうございます」

マチス「クーズ君。君のポケモンは本当にエキサイティングだったよ。またミーと勝負しようつネ」

笑顔で握手を求められる

クーズ「はい。よろこんで」

クーズはマチスと握手をする

何故かマチスと友情を深めたクーズだった

「ディグダの洞窟前」

クーズ「なんでディグダがこんな所にまでいるんだ?」

ディグダ達が洞窟から出ていた

クーズ「よし、デジヨッチ、出てこい。ディグダの話を聞いてくれ」

「デジヨ」

「ディグダ。ディグディグディグダ」

そして話を聞いたデジヨッチは号泣していた

「デジヨ」

クーズ「え?」めん。分かんないから、ドジョッち。お~い
だが泣き止まないドジョッち

クーズ「ドジョッちつて涙もろいのか・・・」

ドジョッちの新たな性格を見つけたクーズだった

ものがたりの一木杉（後書き）

ツヤガ「またまたまた脱線！」

クーズ「もう進める気がないだろ」

ツヤガ「いやだつて省いたら大変なことになるよ。多分」

クーズ「多分つて何？」

ツヤガ「まあ、それはちょっと置いといで。今回はライチュウヒピチューの戦いで良いイメージが思い浮かばなかつたのでテキトーに流しました」

クーズ「そりなんだ」

ツヤガ「さてさて新しい仲間とは誰でしょうかね？」

クーズ「嫌な予感しかしないけどな」

ツヤガ「では また次回に ノシ」

ものがたりの潔癖

結局、事情が分からぬまま洞窟に入る

クーズ「?あれば・・・人影か」

薄暗い中で良く見えない

その人影はハツキリ見え始めると人影とは言えないことに気がつく

クーズ「・・・!?」

その影はクーズに気づき本体が良く見えるようになつた

「人間か・・・」

白い体に最強レベルのサイコ能力。その名は

クーズ「ミュウツー!-!-」

「つるさいな。我が、そんなに可笑しいか」

ミュウツーはクーズを睨み付ける。ちなみにアルセウス同様、脳内に直接話している感じです

クーズ「いやいや。何でここに居るんだよ」

「あの洞窟は誰も来なくてな。暇だから外に出たのだ」

なんか自己中なことで外に出たらしい

「だが町に出れば人間は我的ことを宇宙人呼ぱわりし」

クーズ「（そりや。一般人はミュウツーなんて知らないもんな）」

「だから我は、また洞窟に身を潜めた。この洞窟は面白いな。我的居た所のポケモンと違うポケモンが出るようだ」

逆にハナダの洞窟のポケモンが他の洞窟で出たらゲームバランスが壊れる

クーズ「（原因はミュウツーか）ミュウツー。悪いがハナダの洞窟に帰つてくれないか？」

「！？何故だ。人間」

ミュウツーは今にもキレそうだ

クーズ「いや。こいつらが住めなくなるんだよ」

後ろに居たティグダ達を見せる

「・・・それは我のせいではないぞ」

クーズ「・・・へ？」

クーズは拍子抜けした

「我も注意したが無理だった。だからと言つて、戦闘でも倒せない

ミコウツーが戦闘で倒せない相手が居るらしい

クーズ「（どんなポケモンなんだ？）分かった。案内してくれるか

「ふむ、こちらだ。そういうえば名前を聞いてなかつたな」

クーズ「ああ。俺はクーズだ」

「なるほど。ドクズか」

今まで言われた名前間違えの中で一番ヒドイ

クーズ「（意外と毒舌なんだな・・・）」

多少、落ち込んでミコウツーに案内される

クーズ「・・・」

クーズが見た光景。それは

目がハートなダクトリオがムチュールに群がっている。まさにムチュールのための楽園だ

「ムチュ？」

ムチュールがクーズに気づき反応する

クーズ「ミコウツー。お前、ムチュールに勝てなかつたのかよ」

「何を言つんだ。あの丸いボディ、そして綺麗な唇。良い所しかないではないか」

ミコウジーは完全にアブノーマルなポケモンだった

クーズ「（黙黙だ。）このゲームの伝説つて終わつてる」

そして、クーズはムチュールの前に出る

「ムチコ」

少し、顔を顰める（しかめる）

クーズ「ムチュール。お前の悪事は、俺が許さないぜ。いつてこい、
ドジョウツチ！」

「ジジ...

ドジョウツチは鈍感なのでムチュールにメロメロにならない

「ムチュール！」

ドジョウツチの前にムチュールが出てくる

クーズ「正々堂々きたか。ドジョウツチ、みずのはじつー！」

ドジョウツチから水の輪が出されムチュールを狙つ

「ムチュー！」

だがムチューもただ者ではない。攻撃を避け、ドジョウチに近付き、はたくをする

クーズ「！？」

ムチューのはたくがヒットしたドジョウチは壁に吹き飛ばされた

「氣を付ける。そのムチューは色々おかしいからな」

今さら助言してくるノリカツー

クーズ「ちつ。ドジョウチ。だくじゅう！」

狭い洞窟の中で広範囲の攻撃。十中八九、当たるだらう

「ムチュー！？」

ムチューは、こなゆきを使つ。ドジョウチのだくりゅうは見る見る内に凍る

クーズ「！？防がれた」

だがムチューは次の行動に移行しない

「ドジヨー！」

凍つた、だくじゅうの上からドジョウチがジャンプしてきた

クーズ「よし、ドジョウチ。アクアテール！」

落ちながら放つたアクアテールはムチュールに見事当たる

「ムチュー」

クーズ「よし、チャンス! いけーー

まだ残り60個くらいあるハイパーボールを投げる

ぽん ぽん ぽん

ポーン!

クーズはムチュールを捕まえた

クーズ「よし! 捕まえたぜ。これでこの洞窟は、またティグダ達が安心して住めるな」

しかし1つ疑問が残つた

クーズ「そりいえば、なんでムチュールは動かなかつたんだ?」

「あれはムチュールが氷に映つた自分の姿に見とれていたからだ

自分を愛しすぎた故の弱点だった

クーズ「・・・まあいいか。次はイワヤマトンネルだな」

次の目標も決まつてるので、その目標に突き進む

ものがたりの潔癖（後書き）

ツヤガ「ドジヨツチがカツ」
「いいね」

クーズ「まあ考えると一番最初に手持ちに来たポケモンだしな」

ツヤガ「さあて、ムチュールは、かなりの曲者だね」

クーズ「進化したらルージュラか。嫌な予感しかしない」

ものがたりの扉

今、クーズはイワヤマトンネルの中である

クーズ「ふ〜。ピチューが居るから、そこそこ見えるな」

ピチューが少し電気を漏らして光っている。フラッシュユニットを握った

クーズ「しかし、何も居ないな〜」

トレーナーも居なければポケモンも居ない

そして何も無いままイワヤマトンネルを抜ける

〜シオンタウン〜

ここはBGMがトラウマな町。作者は音を消して頑張りました

クーズ「まあ、お化けの正体はコース達だし、無視してタマムシティに行くか」

特に何もせずタマムシティに向かった

〜タマムシティ〜

クーズ「ロケット団は居るから」「インスロットのポスターの裏にスイッチがあるな」

「インスロットに行き、ポスターの前にいる口ケット団を倒して隠し通路を出す

クーズ「あ～。あのクルクル回るタイルか。あれって回らなくても平氣だよな」

完全にゲームを無視する

口ケット団「！？貴様。誰だ！怪しいやつ！」

クーズの元に走ってきた

クーズ「あ～。そこ」のタイルは回らないといけないんですよ

口ケット団「むつ。そりだつたな。そりや」

口ケット団のしたつぱは律儀に回る

クーズ「ピチュー。十万ボルト」

「ピチュー」

口ケット団「うわやややあああああ

口ケット団は丸焦げになる。これでは、どちらが悪者なのか分からぬ

クーズ「さあて、サカキでも倒すか」

面倒なので口ケット団はリアルファイトで倒していく

そしてサカキが居る部屋のドアの前に来て、ドアが開く

聞き覚えのある声「よお～。クズ、待ってたぜ」

そこには真っ赤な髪、ロケット団とは少し違つ服装をしたグストがいた

クーズ「！？なんでお前が」

グスト「別に俺が居たっておかしくねえだろ？」

回転する椅子の上で回りながら言つ

クーズ「ここはロケット団のアジトだぞ。お前がいた」
グスト「侵略した。これでいいだろ？」

この前も同じことを言われた

グスト「俺ら『フェク団』のこと知りてえか？」

クーズ「ああ。もちろんな」

緊迫した空気が流れる

グスト「いいぜ。そのかわり俺にバトルで勝つたらなー！」

その瞬間、部屋の隅にあったロッカーのドアがブツ飛んだ

クーズ「！？」

ロッカーからは白い髪、グストと同じ服装をした人が出てきた

謎の人物「グスト。分かつてゐるだらうな」

グストの表情が曇る

グスト「逃げるが勝ちだな！！！」

クーズの横を通り部屋を出ようとすると

謎の人物「さて、帰つて、説教だな」

素早く動いたグストだったが部屋を出る前に捕まつた

謎の人物「クーズ。貴様が謎を解きたいならポケモンリーグに来い。
そこで待つててやる」

グスト「おいおい。マジかよ。戦うのけつこう先じゃねえか」

謎の人物「つたぐ。お前といいマナカといい、面倒な奴等しか居ないな」

グスト「ちょ。キイーはどうした。あいつは良いのかよ」

謎の人物「キイーはただ振り回されてるだけだ。見てわかる」

何故か普通な会話をしている二人

クーズ「え？ 会話すいませんが、貴方は一体？」

謎の人物「俺はデフェク団の幹部の一人、アクティード。これ以上のことは教えられない」

そう言って、グストをロッカーに無理矢理、詰め込みアクティードもロッカーに入った

クーズ「・・・え？ あれ、おかしいよな」

ドアは、いつの間にか復活しており、グストとアクティードがロッカーに入った

クーズ「・・・」

恐る恐るロッカーのドアを開ける。しかし、そこには掃除道具とシルフスコープしかなかった

クーズ「（ロッカーの中は四次元ポケットか）」

不思議なことを思いながら、シルフスコープをゲットし、ロケット団のアジトを出た

クーズ「よし。次はエリカだな」

ジムリーダーであるエリカに挑戦しに行くクーズ

途中の斬れそうなウソツキーを斬つてジムに行つた

ものがたりの扉（後書き）

ツヤガ「もう眠いです。布石をするの面倒ですね」

クーズ「まあ。いつも土壇場じやな」

ツヤガ「え？いつも土壇場で考えてるけど」

全く布石の意味は無かつた

クーズ「行き当たりばったりの小説つて、大丈夫かよ」

ツヤガ「今さらだね」。大丈夫だよ。テキトーに書いとけば評論家
じゃない限り上手く書けてる感じになるから」

クーズ「（絶対、その考え方違ってるだろ……）」

ものがたりの勤務

クーズ「うわー。女の子ばかり」

エリカのジムは女の子限定のジムである。挑戦者も女の子で無くてはいけない

クーズ「それって俺は入れないってこと?」

エリカ「はい。そうです。まあ、女装するなら考えてもいいですよ」

そう、このエリカのジムを挑戦した者の多くは女装にハマる

クーズ「(え? なにこれ。ポケモンって、そんな異常なこと開発するゲームだっけ)」

謎を解くため、ジム攻略は必須。仕方なくクーズは女装になるため試着室に入った

エリカ&ジムのトレーナー「!?

試着室から出てきたのはミニスカートの女の子だった

エリカ「クーズさん。合格です! もう私たちは仲間です」

クーズ「ちょ。勝手に仲間にするな」

ジムのトレーナー達が全身を見れるような鏡を持ってきた

クーズ「・・・なんじゅー」「じゅーー」

「どうせ内心、俺、似合つてるとか思つてます

クーズ「思つてないから！」

エリカ「駄目ですよ。女の子は綺麗で居なくては。もちろん言葉使いも」

エリカに女の子指導をされる

クーズ「（やばい。ハマつたら色んな意味で不味いぞ） そんなことよりバトルしましようよ」

精一杯の女の子の真似をするクーズ。そしてエリカも了承した

審判（女）「これからエリカ様とクーズちゃんの試合を始めます

「キャー。クーズちゃん、かわいいーー！」
「エリカ様も頑張つてーーー！」

審判（女）「両者。前に」

エリカ「負けたら私達の仲間になつてもらいますね」

クーズ「ま、負けられませんわ」

クーズはガチだ

審判（女）「試合開始ッーー！」

クーズ「華麗にいきます。出なさい、ムチュール」

「ムチュール」

エリカ「舞を踊る花達を見せましょう。ウツボット」

「ウツヨー」

そして試合が始まる

クーズ「ムチュール。こなゆき、全力よ」

「ムチュー！」

「ウツヨー」

一瞬にしてウツボットが凍りつく

審判「ウツボット。戦闘不能！」

エリカ「さ、流石ですね。では、次は・・・ラフレシア」

「ラフヨー」

クーズ「ムチュール、こなゆきー！」

ラフレシアが出てきた瞬間ムチュールのこなゆきを放ち、ラフレシアが凍りつく

審判「ラフレシア。戦闘不能」

エリカ「・・・キレイhana!」

「ワタシツテキレイネ」

クーズ「ムチュール。こなゆき!-!-」

またまた出てきた瞬間に凍りつく

審判「キレイhana。戦闘不能」

エリカ「・・・なめどんのかーーー!。おい。そこのクズ!-ぶつ殺すぞ」

エリカのキャラが一瞬にして崩壊した

エリカ「まず作者!-テメー面倒だからつてテキトーにすんじゃねえよーーああ?」

不味い発言までしてきましたね

クーズ「(じうすんだ。)れ」

エリカ「ちつ。あとで作者、ぶつ殺す。いけー・ショイ!!-!-」

「ショイミー!」

クーズ「ムチュール。こなゆき!-!-」

クーズは、またこなゆきを一瞬にして出す

エリカ「なめんじやねえよー!最近仕入れた、このショイミをーー・シエイミ、シードフレア!-!-」

ショイミの体の中から衝撃波が発生する

クーズ「！？」

「なゆきは簡単に粉碎されムチュールにシードフレアが当たりムチュールが吹っ飛んだ

審判「ムチュール 戦闘不能」

クーズ「（あのショイミ。不味いな）いきなさい。カモネギ」

「・・・カモ」

エリカ「雑魚が！ショイミ、エナジーボール！」

緑色の球体がカモネギを襲う

クーズ「カモネギ。空に逃げる！」

カモネギは飛び立ち、エナジーボールを避けながら天井近くに行く

クーズ「（これなら衝撃波であるシードフレアの威力が弱まる。あとは、どうやって攻撃をするかだな）」

しかし、これはフラグである

エリカ「ショイミー飛べー！」

「シヒイミー」

ショイミが進化とは少し違う光を出しながら姿を変える

クーズ「スカイフォルム！？」

エリカ「ざまあみやがれ！ショイミ、シードフレアー！」

衝撃波がカモネギを襲いカモネギは落ちる

審判「カモネギ。戦闘不能」

クーズ「（残りはピチューとドジヨツチ。でも勝たないと、この小説が終わる）」

なんか小説が終わるかもしね

クーズ「こきなさい。ピチュー！」

「ピチュー」

エリカ「終わらせやらせるよ！…何もかもな…」

ものがたりの勤務（後書き）

エリカ「作者どこだ――――！」

鬼の形相で作者を探す

ツヤガ「私って代理だから大丈夫だよね？」

クーズ「え、知らないわ。でもエリカがこんな性格だなんて」

ツヤガ「ふつW。似合わないよ」

クーズ「うるせー。俺だってやりたくないから」

エリカ「いつもの、しゃべり方してんじゃねえよ、クズ！」

胸ぐらを掴まれて脅迫されるクーズ

クーズ「は、はい。す、す、すいませんでした」

ツヤガ「次回更新されるのかな。作者が死ななきやいいけど」

ものがたりのラスク

クーズ「ピチュー、でんじはー。」

「ピチューー。」

まずは動きを鈍らせる作戦に出た

エリカ「なめんじゃねえって言つてんだろーー。シェイミー、避けてマジカルリーフ！」

不思議な色をした葉がピチューを狙う

クーズ「ピチュー、避けて」

ピチューはマジカルリーフを避けた

「ショイミー。」

だがマジカルリーフは相手を追尾する能力を持つている

クーズ「！？」

葉が急にピチューの方に来た。ピチューは反応出来ず喰らつ

エリカ「ヒヤハハ。こんなことくらい覚えとけよ、クズ！ラスト、シードフレア！」

衝撃波がピチューを襲う

クーズ「やらせません!ピュー、衝撃波に十万ボルト!」

十万ボルトは衝撃波に当たり爆発を起こす。しかし衝撃波は止まらない

クーズ「アニメ通りにいけるはずよ。ピュー、アイアンテール!」「ピュー!」

「これはタマムシにて~

クーズ「マンションの屋上でジュース買おうかな」

おまわりさんのイベントついでにクーズは休憩しようとしている
だがマンションを登つている時、何か音が聞こえる（階段を使つて
ます）

クーズ「?気になるな・・・。よし、いこ」

クズさん手のなる方へ。ではないがクーズは音の鳴る方へ行く

「ピッカ!」

「ピカチュウ。十万ボルト!」

クーズ「（なんかポケモンのアニメ見てるな）」

そこにはポケモンのアニメ見てる少年がいた

少年「あれ？ お兄ちゃんもポケモンを見に来たの？」

クーズ「いや。音が聞こえて気になつただけさ」

少年「へへ。じゃあ聞こえたなら一緒にテレビ見ようよ」

クーズ「うへん。・・・まあいいか」

時間ががあるのでテレビでポケモンを見る

少年「流石、サトシのピカチュウだよね」

少年とクーズはアニメのことについて話したりする

そして時は過ぎる

クーズ「よし、そろそろ行こうかな」

クーズは立ち上がる

少年「もう行っちゃうの？」

少年の母は少し悲しそうだった

クーズ「悪いな。ちょっとやる」とがつてね

そう言つてクーズは少年にバイバイをし、また階段を登り始めた

クーズ「よし。おいしいみずを買つたぜ」

自動販売機で日当ての物を買つ

クーズ「そーだ。あいつの分も買つていくか」

そういうえば少年の名前は聞いていなかつた。クーズは少年の分の水をかい少年の居た所に帰る

クーズ「・・・あれ？居ない」

そこには少年が居なかつた。いや少年だけでないテレビを、少年がいたスペースさえない

クーズ「どうなつてんだ」

だが少年の変わりに一枚の手紙があつた

クーズ「？」

いきなりだけど実は僕、お化けなんだよね。ちょっとした理由があつてね

誰も気づかないと思ってたけどお兄ちゃんだけが気づいたよ

多分、お兄ちゃんが持っているシルフスコープのおかげかな？

でもスコープから見てないし、見えるはずないんだけどね
とりあえず、僕を見つけた賞品としては、なんだけど、ここに【アイアンテール】の覚え方、書いておくね

そして、その後はアイアンテールの覚え方が書いてあった

クーズ「・・・今まで、お化けとポケモン見てたのかよ」

そして、不思議な体験をしたクーズは少年のために買った、おいしきみずを手紙があつた場所に置いた

クーズ「うん。今でも疑問しかないよな、あの体験」

クーズが悩んでる間にピチューのアイアンテールが衝撃波にぶつかる
十万ボルトで威力が弱くなつたシードフレアをピチューは力でねじ伏せる

エリカ「ちつ。面倒だなー。シェイリ、マジカルリーフ」

また追尾する葉がピチューを襲う

クーズ「ピチュー、十万ボルト！」

ピチューの攻撃で葉は丸焦げになる

エリカ「あめえよー」

ショイミはいつのまにかピチューの後ろに居た

クーズ「（シードフレアかー）ピチュー、アイアンテールー！」

一回転してショイミにアイアンテールで攻撃する

エリカ「死になー！ショイミ、シードフレアーーー！」

クーズ「まだですー！ピチュー、尻尾に電気を集中させなさいー！」

ピチューの尻尾に電気が集中して眩しく光る

エリカ「どんなことしたって勝てるわけないんだよーーー！」

シードフレアと電気を大漁に帶びたアイアンテールがぶつかり爆発を起こす

審判「ピチュー。戦闘不能」

ショイミはダメージを喰らつたが倒れていない

クーズ「（くつ。まだ倒れないか。残りは、こいつしかないない）
いきなさい、デジョッチー！」

「デジモンー」

エリカ「ハハハ。もう終わりだな……シェイミ、シードフレア……」

何回目か分からぬシードフレアがドジョッチを襲う

クーズ「ドジョッチ。爆発しないでね。のみこむ！」

シードフレアのエネルギーをカービーの吸い込みのように飲み込んでいく

だが、かなりの量だ。

エリカ「！？あれ、ノコッチじゃねえか」

いやドジョッチがエネルギーの飲み込みすぎで腹が大きくなりノコッチに見えるだけである

クーズ「よし。終わりです。ドジョッチ、はきだす……」

シードフレアのエネルギーを増大させシェイミに放つ

エリカ「まだだ！シェイミ！マジカルリーフ、シードフレア、リーフストーム！」

シェイミは後ろに下がりながら言われた順に技を放つ

幾度も爆発が起きる。そして結果は

審判「シェイミ。戦闘不能。よつて勝者、クーズちゃん」

クーズ「（ふー。なんとか勝った）」

エリカ「私が・・・負けた・・・」

なんか滅茶苦茶、落ち込んでいる

～色々あつて～

クーズ「よしゃあ～。4つ目のバッジをゲットしたな。もう半分まで来たのか」

半分、取るまで色々あつたと考える

クーズ「じゃあイベント攻略していくか」

ものがたりのラスク（後書き）

ツヤガ「さあてピチューが完全にサトシのピカチュウになりそうですね」

クーズ「カウンター覚えてるから大丈夫、大丈夫」

ツヤガ「（なんでヒカリ？）まあ、それならいいですけど。ようやく終盤の設定やストーリーが決まったので、進み具合がかなり早くなると思います」

クーズ「ああ、脱線の連続だからな」

ツヤガ「うん。脱線のための布石は、いっぱいあるもんね」

クーズ「今回の少年とかか。」

ツヤガ「うう。あと船長の孫とか」

クーズ「（消化するのに時間掛かりそうだ）」

ものがたりの悪靈退散（前書き）

ツヤガ「今日は無駄に変な奴らとコラボ（？）しています。苦手な方は、難しいと思いますが気を付けて下さい」

ものがたりの懸念退散

クーズ「よし。金の入れ歯ゲットだ」

現在クーズはサファリパークにいる

シオントウンでカラカラのお母さんを成仏させロケット団を倒し、
ポケモンの笛を貰った

そして、途中にいるカビゴンを倒し、サイクリングロードを下つて
きた

クーズ「よし。帰るか」

サファリパークを終わらせ園長に会って行く

園長「ふがつ。ほがふがほがふふふひふへへへ。やーないとりちゃん
はあはあ」

何か奇妙な台詞に聞こえたが間違えだらう

クーズ「園長。きんの入れ歯を取つてきたぜ」

園長にきんの入れ歯を渡す

園長「ふがつ。ふふひ。ふうへ。いや~助かった~。ありがとな少
年よ」

きんの入れ歯を装着してひりちゃんと喋れるようになった

クーズ「あ。俺の名前はクーズです」

自己紹介をしていなかつた

園長「おお。そうかクーズ君か。そうじやな、お礼にかいりきをや
るひ

秘伝マシン〇4を貰つた

クーズ「ありがとうございます」

そして園長の家を出る

クーズ「！？」

家を出た瞬間、明らかに怪しい五人組がいた

クーズ「（あの服装は・・・巫女とかのアレか？）」

男「ふうん。貴様には悪靈が取り付いているな

クーズ「あ、悪靈ですか・・・」

男「ふむ。悪靈を取り除くぞ！」

クーズ「ええ！？」

そして五人は謎のポーズをとる。そしてBGMが流れ始めた

「あらゆる困難が科学で解決するこの平成の時代。

人々の閉ざされた心の闇に蔓延る魑魅魍魎が存在していた。

科学の力ではどうしようも出来ない、その奇つ怪な輩に立ち向かう神妙不可思議にて胡散臭い男がひとり・・・

その名は、矢部野彦麿

そう、人は彼を陰陽師と呼ぶ（ドヤツ）

「「悪靈退散 悪靈退散

怨靈、もののけ、困った時は
ドーマン！セーマン！ドーマン！セーマン！
直ぐに呼びましょ陰陽師！
レツツゴー！…！」

チーン。「イエーイ×4回」

あとは動画サイトあたりで聞いてください

クーズ」（これ、完全に作者のイタズラだろ・・・）

正解だ。よく分かったな。この前、ふと聞いたら書きたくなつた

「ピチュー・ピチュー！」

陰陽師達と一緒にピチューが踊る

クーズ「あー、ダメダメ。真似したら変なポケモンになるから

直ぐ様、ピチューを抱き抱える

だがピチューを抱き抱えると恒例のアレが来る

「ピチュー！」

十万ボルトがクーズに直撃する。そしてクーズは倒れる

彦磨「ふむ。悪靈は去ったようだな」

クーズ「いや。これはピチューのせいだろ……」

久々に喰らい、痺れがまだ取れない

彦磨「では、本題に入るか」

まだ倒れているクーズの前に彦磨が座った

彦磨「今回、用事があるのは悪靈でも、もののけでもない。そのピチューだ」

「ピチュー？」

顔を傾げるピチュー。クーズは痺れが取れ、座る

クーズ「ピチューになんの用だ？」

彦磨「最近。ある力が増大してきているのだ」

真剣モードに入る

クーズ「ある力・・・？」

彦磨「その力が詳しくどんな物か分からんが、恐らく負の感情によるものだろ?」

クーズ「（負の感情・・・）」

彦磨「我々、陰陽師は恨みや憎しみを宥めることも仕事の一つだ。この力は負の感情だと思うのだ」

ピチューは聞きあきて眠たそりである

クーズ「必ずしも負の感情ではないと?」

彦磨「ああ。もしかしたら似ている力かもしれんしな」

クーズ「似ている力?」

彦磨「例えば、育児になれない人が赤ちゃんの世話をした時に、大変だなあ、と感じる時の感情などだ」

クーズ「あ、ああ。（分からぬ・・・）」

彦磨「そんなことは問題ではない!そのよく分からない力に対抗すべく、抽選で選ばれた貴様のピチューにスペシャルな技を教えてやる!」

クーズ「おお!（抽選つてなんだ。抽選つて）」

彦磨「貴様に断る権利などない!...」、「つちだ!」

断る気は無かつたが無理矢理、連れ去られた

場所は園長の家の後ろにある庭だ。ギャラドスが釣れる場所の一つ

彦磨「では。始めるぞ」

恐らく修行が始まるのだろう

彦磨「いい。ヨノワール」

「ヨノー」

クーズ「よし。こつてこ。ピチュー！」

「ピチュー！」

彦磨「貴様から、いい！力を見極めてやる」

ずいぶんと余裕があるようだ

クーズ「最初から、そのつもりだ！ピチュー、十万ボルト……」

「ピチュー……！」

渾身の十万ボルトがヨノワールに当たり爆発が起こる

そして煙が引いた後ヨノワールの姿が見える

彦磨のヨノワールは十万ボルトを喰らっても全くダメージを受けて

い
な
い

クーズ&ピューリー「...?」

彦磨「ふむ。この程度か」

試合はまだ始まつたばかりだ

ものがたりの悪靈退散（後書き）

ツヤガ「ホントなんで出てきたの？」

クーズ「俺にも分からぬいし」

いや。ほら、気分で投稿するから気分で内容が決まるんだよ

エリカ「作者テメーッツー！」

！？やばい。あと三口シク！

作者はエリカから素早く逃げる。しかし見えなくなつた所で悲鳴が聞こえた

ツヤガ「・・・まあいいや。ピチューに技を教えますね」

クーズ「ピチューばかりが強くなつていくな」

ツヤガ「ピチューは進化しないから種族値で考えると一番弱いよ」

クーズ「そう考えると技で補正をかけてる感じか」

ツヤガ「そうかな。では また次回に」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8394v/>

ポケットモンスターの可能性

2011年11月29日19時58分発行